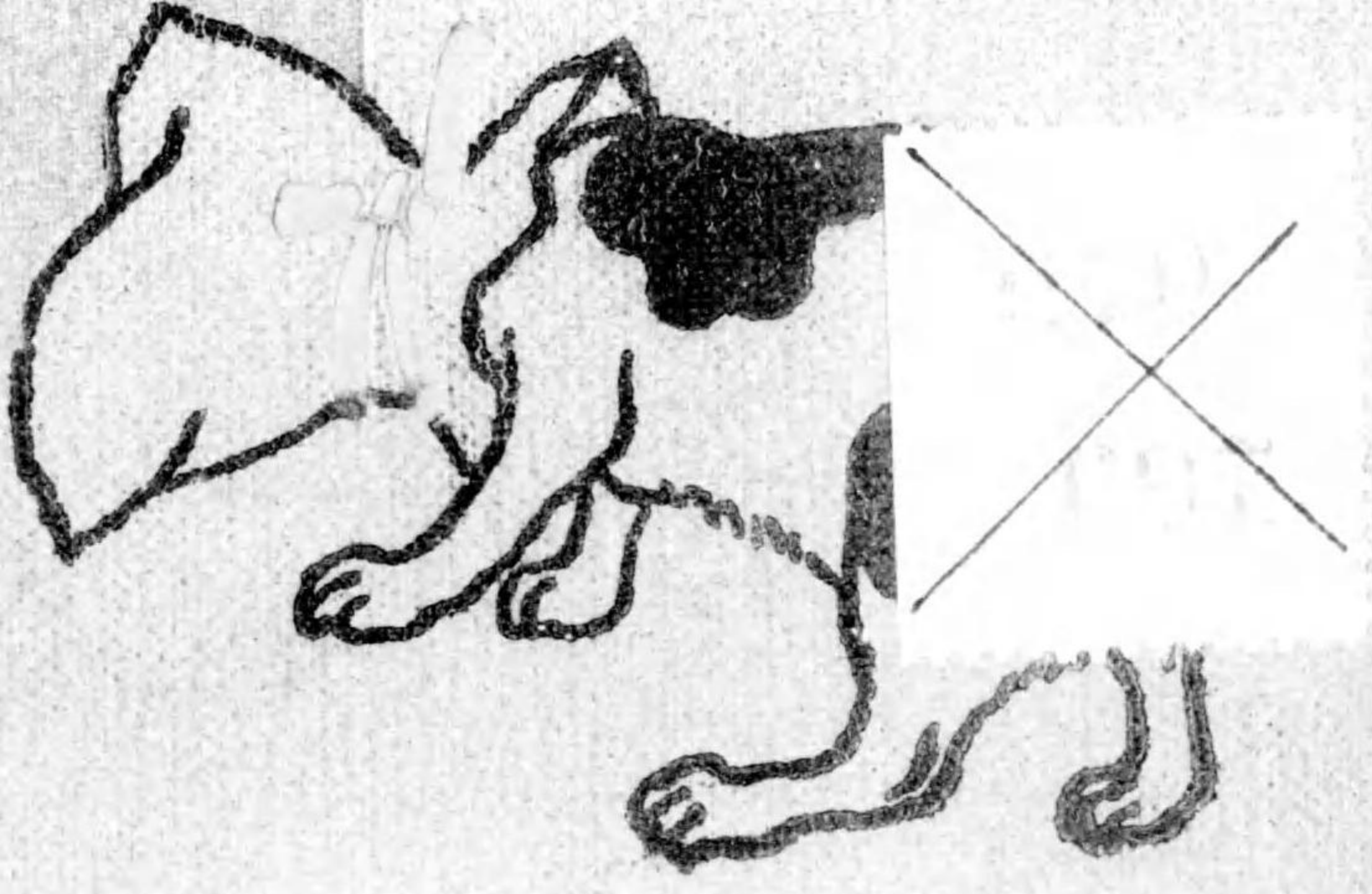
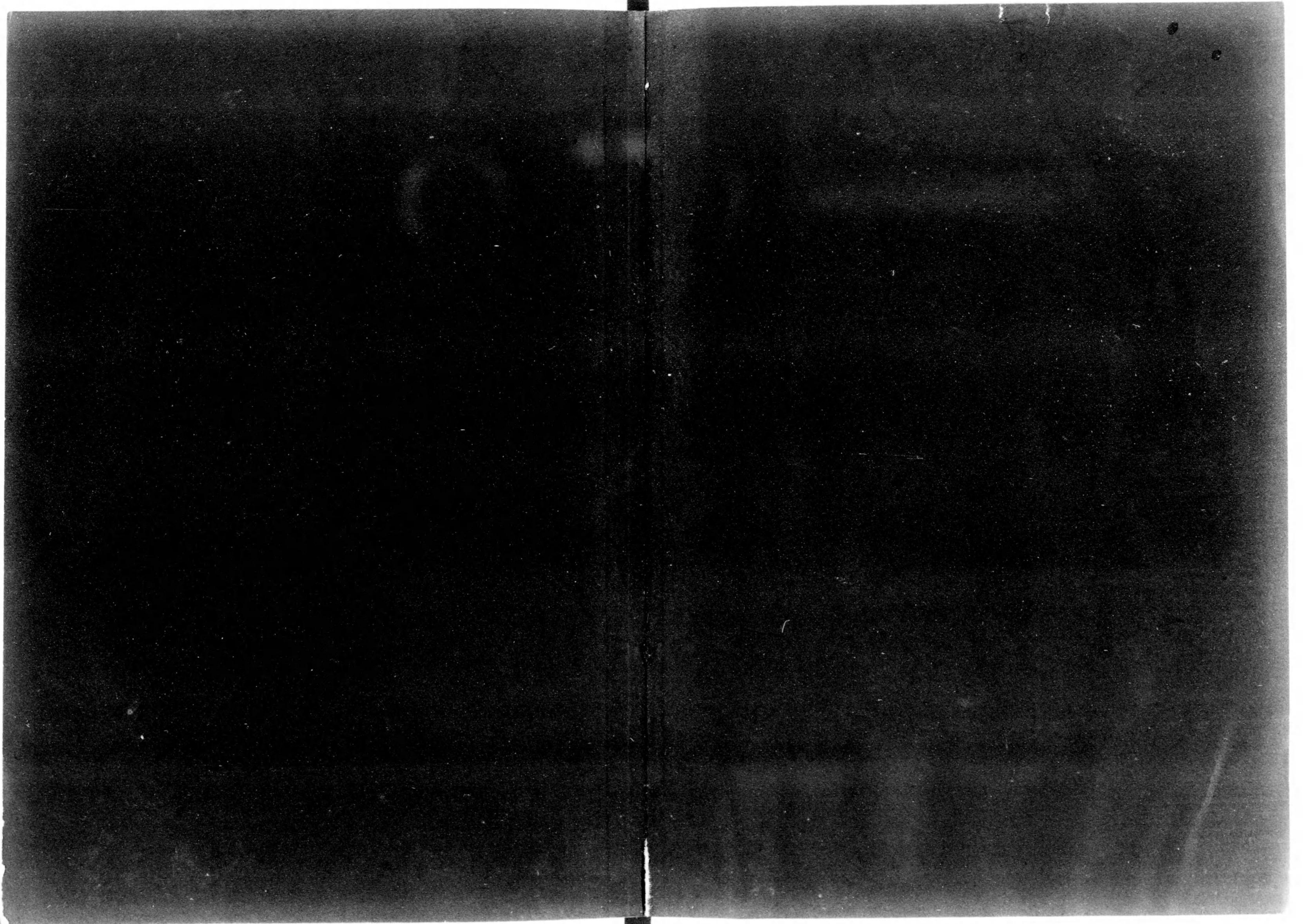


始



山
本
山
山
山





特 100
39

藤井紫影先生序
大槻如電影先生序
十世川柳及翁先生
西原柳雨編閱

川柳難句類解



東京 博文館藏版

序

曾て俳筵に於て前句は忘れたりしが余の附句

雲井のかりのみえみ見えすみ

とせしを寂羅坊が先生それでは連歌ですと云ふおゝと
心づき

雲間のかりの見えつかくれつ

とせんと云へばそれでこそ俳諧と一本まゐらる余は即
時に又川柳ならば

雲からがんが出たりひつこんだり

かねと、共に大笑せしことありき、連歌と俳諧と川柳とは
此言葉づかひの差にあるなり、今の川柳連中に此別を心
得たるもの無きが如し如何、川柳の難句は古來研究する
やから多くあり、されど其時代々々の流行物をよみしな
れば、今日にては其詮索甚だむづかし、強て解するにも及
ぶまじと常に思へり、それをときとげんとすれば、川柳な
らぬ五柳先生に笑れもせんか、反對の一言を題す

庚戌中夏

自念坊如電

序

俳諧に不易流行の説あり、千載不易の人情景物を詠じた
るは後人了解に苦まずと雖も、一時流行の人事通言を結
びたるものは、物換り星移りて其意を捕捉するに惱ます
んばあらず、川柳點の狂句の如き殊に然り、偶々女房の焼く
程亭主もてもせず「賣据と唐様で書く三代目」の如き不易
の句なきにあらねど、多くは其時其場の流行を穿つに急
にして、言語風俗の小止みなき變遷とともに、意義の晦澁
に陥るを免れず。晝三、振新、淺黄、伊勢屋の類、これを今日

通用の辭書に求めて得べからず、酒が出たので評定が長くなり、酒井雅樂頭の仙臺騷動に關係せし事を匂はせ「果報いみじく御物見で蓮を見るに、池端の榊原侯が高尾を身請せし件を利かしたる如き、明治生れの人々には耳遠き故事來歴なるべし。柳雨子斯道に執心深く、難解の川柳千句を釋して丁寧深切、千手觀音を備うて痒い處を搔くが如し。誠に人助けの善根にして、古典舊型に捕はれざるを表看板にして、無學無識の樂屋を隠し、洒落も穿ちもわからぬ明治の淺黄共に、江戸前の通な處を南品の遠目鏡で安房上總を見るやうに、只一目に手に取る如く

覗かせやらんとの大慈悲ならんかし。

明治壬子の春正月

紫影生しるす

自序

一、その當時の出来事を縦横無盡に詠み出だせる川柳の古句を、後世より解釋しようとして試むるは、至難の業であつて、そんな事に憂身を篋して骨を折つたら陶淵明から笑はれようぞと如電先生は仰せられた、けれども持つたが病の川柳道樂、解らぬことは解らぬとして抛つて置くことの出来ない性分、業務の餘暇を偷んで兩三年來向鉢卷兩肌拔の大車輪で古句研究に取掛り、その得たる結果中より試に一千句を抜出して若輩極まる

解説を附けて見たのが此編である

一、大凡川柳を解釋するには先づ同型の類句を拾集し、甲を以て乙を推し乙を以て丙を察し比較對照その意義のある所を探求するを以て至便の法なりと確信す此書其法による

一、平句と云ひ難句と云ふもとこれ程度問題であつて只看る人の造詣如何によることは勿論の話である、本書は始めて柳門に入らんとする初心の人を以て標準としたのである

一、本書選擇する所の句は所謂難句であつて必ずしも名

句のみではない、難句と名句とは自ら別物であることは云ふまでもないことである

一、先輩の既に公刊せる解釋は務めて収録することを避けたれども寡聞にして悉く其書に接せず或は重出のものなきを保せず尤例證句若くは説明句として故らに借用したるもの二三はある

一、一應脱稿の上藤井大槻兩文學博士の内閱を乞うたるに毎句年代を記入したらば如何とは兩氏符節を合するが如き御意見であつたけれども最初よりその計畫でなかつた爲今更その詮索には大に魔誤ついたので

ある、やつとの思で大部分柳樽中より照合記入を了したれども、千中七八十句許は終に出所を明にすることが出来ないのは如何にも残念である、されば句體によつて漫に想像を加へず不明の分は斷然？印を附して他日の修訂を俟つことにしたのである、尤（拾遺）とあるは柳樽拾遺中時代不同とあるものにして多分明和以前の句（滑稽）とあるは天保二辛卯十月素行堂松鱸撰になれる六冊物にして文化前後の句多きが如く思はる

一、著者は江戸は借置き實は東京さへ碌には知らぬ丸拔の田舎者である、されば篇中定めて途方もない見當違

の誤も多かるべしと思はる同好の士笑ふことなく教を垂れ給はば幸甚の至である

大正元年冬

著 者 識

川柳難句類解

西原柳雨編



五代目に唐の弓矢が用に立ち (安永代)

楚の國の養由基と云ふ人は矢を番へて狙うたばかりで行雁列を亂して地に落ちしと聞えし程の弓術家なりしが七百歳の壽を保ちたる後榊花女と稱する我娘にその弓箭を傳へて死し榊花女は我朝の源の頼光の夢枕に立ちてこれを授け頼光は大に喜んで重代の家寶としたとあり(源平盛衰記)

偕て頼國頼綱仲政と經て頼光五代の孫にあたる源三位頼政は此弓箭

を以て紫宸殿に鶴を退治したとなり

養由が一番弟子は日本人 (安永代)

唐の弓矢で鶴は射殺され (安永代)

類推すべし

栴花女の出る土弓場は入があり (安永代)

土弓場も美しいのを的におき (天明代)

土弓場とは射梁アツチの的に射るより土弓と云ふ楊弓の木製の的なるに對す人の出盛る場所などに設けて客を引ききたる射場なるが矢張り楊弓店などと同じく容貌イモよき矢取女を囿ワトリに出して置くとなるが天女のような美形が弓矢を持つて出る店はある筈なり

深川の土弓射習ふ草履取 (寶曆代)

深川八幡の東手にある三十三間堂にて且那樣通し矢の間に草履取は

社内の土弓場に栴花女の的を狙ふとなり

主従で鶴に十ヶ所きずをつけ (拾遺)

謠曲鶴に「南無八幡大菩薩と心中に祈念しつゝよッびきひゃうと放つ矢に手答してはたと當る、えたりやおうと矢叫びして落つる所を猪早太つゝと寄りつづけさまに九刀ぞ刺いたりける」云々とあり十ヶ所の意味明かなるべし

猿虎に合はせて蛇の役不足 (拾遺)

鶴は猿頭虎胴蛇尾の怪物なりとあれば尻つ穂に廻はされた蛇は割に合はぬ役前だとなり

鶴の尻にくちなは毎度當惑し (拾遺)

猪の隼太尻つ穂で肩をくひつかれ (安永代)

類推すべし

夜といふ偏に鳥だと笏でかき (明和代)

及腰鶴の尻べた笏でぶち (明和代)

文道は兎も角も武道に掛けては空穴カラを押立オツタテて遠いところから頼政の射留めた鶴を取巻いて喧々囂々大評議をなせる公家衆の状躍如として見るが如し

兼題は鶴で當座はほとゝぎす (寛政代)

鶴退治の功により當座の褒美とありて上より師子王と名くる名劔を賜はりける時恰も杜鵑啼き渡りければ關白基實公取敢へず「郭公名をば雲井にあぐるかな」と詠み給へば頼政階下に跪きたるまゝ直に「弓張月のいるにまかせて」と下を附けたりとは人の知る所なれば即題が杜鵑で宿題が鶴だと歌の題によるへて可笑しく詠みたる迄なり

夜の鳥時の鳥とで名をあげる (寛政代)

頼政はありがた山のほとゝぎす (天明代)

類推すべし但し難有山の山には別に意義なし北山時雨の山、位の處なるべし

いづれとは少しあやめの不足なり (明和代)

其上の恩賞とあつて豫て頼政が戀慕うて居る菖蒲の前を賜はるとて同装の美女二人と並べ此中より選び取れよとの勅諭には有繋の頼政も少々面喰つて「五月雨に沼の石垣水こえていづれかあやめひきぞわづらふ」(盛衰記による)と遣つてのけたとあり、されば我れ程の美人を二人の御多福と見較べが付かぬなどは此親爺餘つ程毫碌して居ると菖蒲の前が愚痴をこぼしたりとなり

弓矢とつてはひきぞわづらはす (文化代)

あのとときは氣がもめたよと菖蒲いひ (文化代)

類推すべし

蟬折を宮六度まであけて見る (安永代)

蟬折は唐王より鳥羽院へ献納したる名笛にて後、高倉の宮に譲り給ひ宮は肌身放さず愛藏あらせられたり後頼政の亂に園城寺を出で、宇治に走り給ふとき數日の間安々御寢もならざりし御疲勞のため僅か三里ばかりの道程に六度まで落馬あらせられたとは盛衰記に説く所なりされば落馬の度に大切な笛が折れはせざりしやと出して見給ひしとなり

高倉の宮だと馬場でなぶつてゐる (明和代)

乗馬の稽古なり前句より類推すべし

頼政に口とり六度しかられる (?)

六度目は茶の木の上へおつこちる (明和代)

類推すべし茶の木にて宇治を隠して云へるなり

椎の實で榮え茶の木で終るなり (安永代)

頼政は宇治川の一戦に破れ平等院に皺腹を切つて相果てたるが最初は「上るべきたよりなければ木のもとに椎をひろひて世を渡るかな」などと不味い洒落を云つて四位から三位に昇進したといふ、とんとん拍子の時代もあつたが盛者必衰の天則に洩れず憐な終をとげたとなり

頼政の扇に夜の金砂子 (滑稽)

頼政最後の跡は扇の芝とて今猶ほ存在する舊蹟なりされば扇の地紙の金砂子を螢に見立て、宇治の夜景を詠じたる迄なり

切落し平等院へ乳母が尻 (寶曆代)

跡たのむ扇の芝の切落し (寶曆代)

此二句は芝居の切落しなるが今の高土間にあたる所を切落しと呼びその舞臺際の三角形になりたる所を扇の芝と唱へ割込の^下等棧敷なるが甲句は所謂今日の何錢均一の場所即ち平等院へ二人前もある大きな乳母の尻を割込まれたさまを云ひ乙の句は鳥渡便所に立つた跡を塞がらぬやうに頼むと頼政の最期を利かせて云ひたるなり

續かぬと宇治殿百茶かひ給ひ (文政代)

序に少し毛色の變つた宇治の二三句を拾つて見んに此宇治殿は大納言隆國卿なり隆國卿宇治の別莊に接待茶屋を設置^{シテ}御自分は奥の間に陣取つて寄り來る土民の種々雜多なる珍談奇話を聞き書して著作せられたのが例の今昔物語と云ふ本である、されば立替り入り來る大勢に振舞ふに上茶など煎じては間尺に合はぬと一斤百文位の番茶で濟されたとなり

薰をば茶にして匂ふ宇治へ行き (文政代)

源氏物語宇治十帖の中にある情話を柳化したる句にて宇治の里に住ひせるさる宮方の姫君に懸想して通ひたる薰、匂と云ふ二公子ありしが匂の方が戀の月桂冠を戴いて一旦内室と定められたとあり宇治茶、薰、匂などの縁を綴り合はせたる迄の句なり

宇治がらの二番せんじもかをる也 (文政代)

宇治の宮の妾腹の姫君浮舟は薰の掌中の玉となりたりとあり其餘は類推すべし

椎の木を祝ふ頼政うらむ曾我 (安永代)

椎の木一本に幸と不幸との陰日向あるを云へる句にて怨む曾我とは兄弟の父河津三郎が赤澤山の狩座^{クサ}に椎の木の影を小楯にとり射つて放てる近江八幡の矢先に空しくなりたりとあればなり

椎の木を曾我ではうらみ猪牙でほめ (寶暦代)

猪牙舟から褒める椎木はぐつと方角違にてその頃兩國橋より遡りて少し漕上れば東岸本所石原町松浦邸の名高い大椎木が見えたとなり猪牙のことは後にいふべし

椎の木は殿様よりは名が高し (安永代)

ふとんから首松へ出し椎へ出し (安永代)

佳^{フナトリ}は下總公は武藏なり (天明代)

隅田川はもと總武兩國の分界線をなしたるものなればその東岸にある木扁に佳の松浦の椎の木は下總分にて其向岸の御米藏にありたる木扁に公は所謂有名なる首尾の松なるがこれは武藏領だとなり

十返りも見ると不首尾の松となり (?)

なんば首尾の松とて餘り屢々舟で山谷通ひして此松の下を漕廻はす

と親爺か乃至は主人の前が不首尾となるとなるが特に十返りと云へるは松の花を巧に利かせたるなり

正直は四つ手萬八舟で見る (文化代)

文化文政代に淺草馬道に正直茶屋と稱する蕎麥屋ありて吉原通ひの四つ手駕の内より目につき又柳橋の角にありたる萬八樓と云ふ其頃名代の料理屋は山谷堀を経て北征する舟の客の目につくと、陸の正直と河の萬八とを掛け合はせたる句なり、但し萬八とは嘘の通言なり

柳ばし角に大きなうそつつき (文化代)

類推すべし

正直のそばから見えるうその屋根 (文化代)

この嘘の屋根は吉原を指せるものなるべし

椎の木の根へおつかけて弓を張り (安永代)

此椎の木は前句によりて推解難からざるべしされば筆の序に曾我に
關する數句を拾つて見よう

蝶々や千鳥に化けるかはづの子 (滑稽)

河津の子を蛙の子に掛けて兄弟を云へる句にて曾我狂言の芝居など
には兄十郎は千鳥弟五郎は蝶の模様ある着附にて出づるが故にかく
詠みたるなり

祐經はおたまじやくしに喰ひつかれ (?)

河津(蛙)の子なればオタマシヤクシ蛸と洒落れたる迄なり

蝶々と千鳥を鶴がひきあはせ (天明代)

これも芝居にて例の對面なり鶴の丸は朝比奈三郎の定紋なり

振袖にうかと思へば蝶々おさへられ (滑稽)

振袖の少女に蝶々が押へられたとは表面にて裏面には女装したる御
所五郎丸の爲に五郎時致が生捕られたとなり

蝶々の酒を露ほど吸つてさし (文化代)

此蝶々は全く方角違の雄蝶雌蝶の長柄の銚子にて婚禮の花嫁御寮を
云へる句なり

千鳥かと思へば蟹が文彌なり (?)

此千鳥は本物の千鳥にて濱邊にて蟹が文彌節を唄つて居たのを最初
は千鳥が鳴くのかと思つたとなり文彌節は元祿の頃京都の盲人岡本
文彌の唄ひ始めたる淨瑠璃の一種にして細く悲しい泣くやうな曲と
見えて文屋康秀の吹からにの和歌をモテ綴りて「文彌の安姫泣くからに
よくうれる」など類句多けれども孰れも説明に憚ある句のみなれば
略す

五郎丸お待なんしと抱留める (安永代)

お待なんしと殊更に吉原詞を用ひたる所に此句の生命はあるなるべし當時鎌倉武士は大磯あたりの化粧の者に現を抜かして内々そつと狩屋々々に呼び寄せ枕席に侍せしめたとありされば五郎丸が花魁の假聲を使つて時致に油断させたとなり

箱根からこつちで化けた五郎丸 (安永代)

箱根以東には化物は出ぬとの俚諺を利かせたるなり

六月四日 犬坊は寺まゐり (天明代)

富士の夜討は建久四年五月二十八日なれば工藤の子犬坊丸が一七日の寺詣をしたといふ丈なり

敵討をとゝひだよと富士まうで (？)

富士淺間社の祭は六月一日なればなり

清姫をひつさげてくる富士まゐり (？)

麥藁が化けて蛇になる暑いこと (文化代)

駒込などの富士淺間社にて六月一日祭には五色に染めたる麥藁細工の蛇を賣る店ありて參詣の人蟲除(一説に雷除)の御守なりとて求め歸りて水瓶の上などに吊るし置きたるものなり

ゆで榮螺^{サッエ}麥藁の蛇のぬけたやう (文政)

此日又榮螺の壺焼を賣りたりと

宮芝居如何にも曾我が貧に見え (明和代)

曾我祭する日から芝居金がなし (明和代)

江戸の習慣として春狂言には吉例として曾我を演じたるものにて五月二十八日にはその報賽のために曾我祭と云ふ式祭を行うたるものなりされば宮芝居にては衣裳萬端不揃なれば兄弟の扮装も吝嗇臭く

又芝居座にて春狂言後は兎角金が足らぬとて貧亡曾我といふ事を利かせたるなり

ひつきやうが箱根へやるも口へらし (明和代)

赤腹を釣つて箱王叱られる (明和代)

箱王丸を箱根に遣つて稚兒としたのも畢竟家政不如意のためであると同じく貧亡曾我を利かせたる句にて蝶鰻オキナリを釣るとは箱根の湖を隠して五郎の腕白をいひたる迄なり

なけなしの錢でたいまつ二本買ひ (明和代)

貧乏な兄弟はあるかないかの錢にて二本の松明を買ひたりとなり

梶原と火鉢の灰に書いて見せ (寶曆代)

大磯の遊君虎御前と十郎とは特別誂の深間なりしとは人の知る所なるが色男金と力はなかりけりの本文通り十郎は何時もピーク風車

の素漢貧なれば虎の脛を喋しゃぶつて、ちよんの間の隠れ遊び、一體誰だい今夜のは、いやに大風に駄々羅大盡を極込んでるぢやあないかと云ふのを虎がシートと被せてあれさ静におしよ、何時もの下知下知だよと火箸で梶原と書いて見せたと云ふ御安からぬ所を云つたのである、

宵立があると祐成呼にやり (拾遺)

十郎は度々虎の皮をはぎ (文化代)

類句として掲げ置く、但し宵立とは晝夜の揚代金を拂つて女郎の身を仕切つて置きながら宵の口に歸り去りたる客をいふなり

兄弟の仕舞仕事に大天窓 (?)

頼朝を刷毛序とは大きすぎ (明和代)

工藤を片付けた刷毛序に祖父の仇たる右大將の首まで狙うたとはち

と望が大き過ぎたとなり俗説に頼朝の頭は甚た大きかりしと云ふ

拜領の頭巾梶原ぬひちゞめ (文化代)

類推すべし

御子孫は西の國でも大天窓 (明和代)

對に振る白髪立派な大天窓 (文政代)

これは二つ共薩州島津家を指したる句にて島津は頼朝の末裔なりと云へば大天窓にて利かせたるなり對に振るは白熊ハクマの二本道具を云へるなり

一に富士二に鷹の羽の紋所 (?)

一富士二鷹三茄子と云ふ夢占の語調をかり來つて我國の大復讐たる會我と赤穂義士とを對照したる丈の事なり淺野家の定紋は丸に交ひ鷹羽なることは廣く世の知る所なり

千駄木に鷹駒込に富士と茄 (文政代)

これ亦夢占を柳化したる句にて千駄木は鷹匠組の住ひたる所駒込の富士は前既に云へり茄は次の句にて考ふべし

那須の與市様を駒込だと覚え (文化代)

文化代頃には駒込に茄子の夜市を開きたりと

敵討親と主とは雪と炭 (安永代)

これも會我と義士とを云へる句にて一方は高嶺タカネに雪を戴ける富士の裾野一方は炭部屋なればなり

杉部屋にかくれると手におへぬなり (安永代)

炭部屋に隠れたればこそ首尾よく本望を遂げられたが萬一杉部屋に逃込まれたら容易な事ではなかつたらうとなり杉とは上野介の子の養子に行つた米澤の上杉家を指したるなり

皆出ると千字文でも足らぬとこ (文化代)

大石以下四十七人打入の装束は雁木模様の火事羽織に兜頭巾の前立には伊呂波四十七文字を割つて一字づつ附けたとは伊呂波文庫などにて云ふ所なるが五萬石の播州赤穂の家臣が皆出たら假名手本所の騒ぎでなく千字文を一字づゝ割當てゝも足らぬ所であつたとなり

一字づゝ化けて屋敷の様子を見 (安永代)

伊呂波四十七人が色々に身形を窺して本所の吉良邸を探つたと云ふ丈なり

三年でいろはを上げる本望さ (寛政代)

侍の手本三年目で清書 (文政代)

類推すべし

孝よりも忠義は二十三多し (文化代)

唐土の二十四孝よりは我國の義士の方が二十三人多しとなり

いさましい鷹を雀が出てとがめ (?)

首尾よく本望を遂げて芝泉岳寺へ引揚げの途中芝口仙臺公の御門前にて咎められ却て粥の馳走に預りたる話は夙に人口に膾炙する所なるが鷹と竹に雀の紋所とをうまく對照したるなり

米に弓二張雀鷹へ出し (文化代)

粥と云ふ字を割つた丈の句なり

和歌の家とお預けも十七字 (安永代)

四十七人の義士はそれト四家の大名に分ち預けられたる中に大石以下十七人肥後熊本の城主細川家にて引受くることになりたるがもと細川家は和歌俳諧に名を得たる幽齋公の末裔なれば十七文字は丁度適當なりと云ひたるなり

和歌の御家は替紋もさくらなり (?)
細川家の定紋は九曜なれども替紋は櫻なれば歌よみの御家柄に似合ふとなり

御領地も源氏程ある和歌の家 (文化代)

一曜が六萬石の御高なり (寛政代)

六九五十四は源氏五十四帖にてどこ迄も文道の御家なりとなり

お蟲干達磨のそばに古今集 (文政代)

これ亦細川家を云へる句にて達磨と古今集とは同家にとりて頗る因縁ある重寶なること左の數句にて類推すること難からざるべし

敷島の道普請には軍留め (文化代)

歌人は居ながら一城を持こたへ (文化代)

二句共に細川家と古今集との關係をいへるものにて入道幽齋嘗て石

田三成の大軍に圍まれ田邊の城に籠ること五旬時の朝廷得がたき歌人と共に其家に藏せる古今集の秘傳の失はれん事を惜み給ひ特に勅使を遣はして双方を諭し終に兵を解しめたまへりとなり甲は車留を軍留に乙は名所を知るを一城を持こたへに緜りて狂句としたるなり

忠臣は達磨の衣色をあげ (文化代)

細川の血達磨とて芝居などにて人の知る如く忠臣大川友右衛門炎々たる猛火の中に飛込み腹を切つてその中に重寶達磨の一軸を藏め焼亡を免れしめたと云ふされば達磨の赤い衣を血に染めて色上げをしたとなり

掃除しておいた座敷へお預り (安永代)

義士の打入は元祿十四年十二月十四日なりされば前日乃ち十三日は當時江戸城を始めとして町内一般の煤掃をなすの慣例なれば掃除の

翌日に四大名が義士を預つたとなり

さつぱりと掃除をさせて首をとり (明和代)

類推すべし

古疵の再發 師走 十四日 (天明代)

足掛三年前に殿中松の御廊下に於て内匠頭の爲めに受けたる肩の古疵が再發してとう／＼命をとられたとなり

明店の札所々に張る 十四日 (安永代)

四十七士の面々身を窺して江戸町内方々へ侘住をなし居たるが十三日の晩迄には悉皆借屋を明渡して敵討に出掛けたので翌日數軒の明屋が出来たりとなり

炭部屋も尋ぬて見ると 十三日 (天明代)

これは全く煤拂の匂なるがその御仕舞には大勢よりたかりて奥役人

時として女中などを捕へて胴上げなどなしたるものなりされば十三日は屋敷中どたばたにて全で十四日の打入よろしくの混雜なれば態と炭部屋と云ひて胴に上げらるゝ師直役の逃げ隠れたるさまを云ひたるなり

十三日 勘略奉行奥へにげ (明和代)

十三日 おはした目より高く上げ (明和代)

よく／＼が 十四日まで腹をたて (明和代)

皆類推すべし但し勘略奉行とは勘定高い事ばかり云つて下々に憎まれて居る禿天窗の三太夫にてもさせるか御端女オハシタメの方は大道曰よろしくの御尻オシヤを餅に搗いて喝采ケサイと云ふまでの無邪氣イタヅラなる悪戯イタヅラなるべし

十三日 やりて一期のひけをとり (拾遺)

これは女郎屋の煤拂なるべし兼て憎まれて居る鴉母が大勢の女郎や

新造等に手ひどく胴に上げられて突放され強い目エラに遇つたとなり

ひとりもの一なぐりだと笹を買ひ (明和代)

大高源吾の竹賣にて人の知る通り江戸にて煤拂の日には竹賣とて枝葉のついた竹を賣り歩るきたるものなり

女竹から男竹にうつるいそがしさ (寛政代)

煤掃が濟む餅を搗く掛取がくる懸て松飾の仕度に掛るいやはや年末は目の廻る程忙しいとなるが句面より察するに煤掃に用ゐたるは女竹なりしが如し

此君が内にはひるといそがしひ (文化代)

此君は竹の異名以下類推

黒く白く二度よごれると春となり (安永代)

白く汚れる方は餅搗なり

四度目の竹はめで度黒うなり (天明代)

正月、七夕、盆の次の竹は煤掃なり

お竹どのどうだと凡夫尻をぶち (文化代)

江戸大傳馬町問屋佐久間平八が下女に竹といふもの深く佛を信じ水盤に光明奇怪の事あり後その流しを當院に納む云々とは江戸砂子五卷芝新堀端心光院の條下に記する所なるが此下女大日如來の化身なりとしてその頃江戸中の大評判なりしとなりされれば凡夫の淺ましさにさる尊き生佛とも知らずつひ通常アタリマヘの相模女ぐらゐの積りで尻をたたいたとなり

お竹が尻をたゝいたらくわんと鳴り (文化代)

金佛の化身なれば尤なる事なり

右の袂をみじかくし米をとぎ (文政代)

右の肩あらはしお竹流しもと (文化代)

表面は讀んだままの句なるが裏面に右肩拔の佛像を隠したるなり

ごし／＼はお竹六祖はへんたらこ (文政代)

六祖は搗くに大日はといでゐる (文化代)

二句同想異曲六祖大師の像を見ればいつも碓を踏み給へり、されば柳界にては米搗の異名として用ゐられたり此二句は大日六祖の二佛を並らべ一方はゴシ／＼と米を磨き一方はへんたらこと臼を搗くとなり

ぽんぽちの菩薩に六祖骨ををり (文化代)

ぽんぽち乃ち陳倉米とは久しく倉に貯へたる古米のことにて菩薩とは米の異名なり

挽臼は菩薩のばちで目がつぶれ (文化代)

竹槍で菩薩の腹をゑぐるなり (文化代)

菩薩の説明句として添ふ但し竹槍は米屋の使ふ刺の見立なるべし

御せんたき菩薩と化して煙となり (文化代)

お竹を隠して飯を炊くさまをいへるなり

お竹きて佐久間の犬は首陽山 (文化代)

めしたきのお竹に犬は尾をふらず (文政代)

お竹如來は常に流しの出口に金網を張置き飯器などを洗うて流れ去る飯粒を溜めて食ひ主家より下さる己れが飯は悉く乞食などに恤み與へたりとなりされば犬が喜ばぬも至極尤なりとなり首陽山とは餓うるの意次の句を見るべし

兄弟で書のをしを喰ふいちつぱり (文化代)

周の武王が紂王を討たんとする馬前に立塞がり臣として君を弑する

は不仁なりとて苦諫した例の伯夷叔齊の二人も偕て周の世となつて見れば何となく極りが悪く周の粟を食はずなどと瘠我慢を起して首陽山に隠れ蕨を食ひながらとう／＼餓死したとは誰も知る通りの話なるが蕨を書のしと見立てた所に此句の生命はあらんか

瘦せこけた死骸があるとわらびとり (安永代)
類推すべし

日阪でたえぬ噂は首陽山 (文化代)

日阪は五十三次の一にて金谷と掛川との間にある一驛なるが例の東海道の数へ歌にも「名物蕨の餅を搗く」とある如く此地にて蕨餅の名物を喰ひながら伯叔の噂をするといひたるなり

日阪はくはれぬとこを繩になひ (安永代)
類句として筆の序に書加へ置くのみ

妾佛遊女に菩薩下女如來 (文政代)

此菩薩は普賢菩薩にて佛は清盛の愛妾佛御前なり次に解くべし

江口のおいらんこつちからをがみんす (文化代)

普賢菩薩、妙まといふ江口の遊女に化し西行法師と問答の後白象に乗りて天界に去りしとは謠曲江口に説く所なるが女郎の常套語を轉用して客の方から拜んすと云つた所に此句の柳味はあるなるべし

をがみんすなどいはれて舌を出し (寶暦代)

普賢ならぬ歌舞の菩薩に拜んすと手を合はされておつと合點承知之助心配せず待つて居なせへと無心の安請合をしながら横を向いて舌をべろりなどは、此奴なか／＼喰へない客と見えたり

清盛は佛の爲に迷はされ (文化代)

佛の爲に悟らずに迷うたといふ丈の趣向に過ぎず

加賀骨をひらき西八條で舞ひ (安永代)

西八條の御殿に加賀骨の扇を開き翻翫婆娑として奏で舞ひたる白拍子佛の艶麗に有繫の入道も涎を垂らしたとなるが扇にて佛の出生地を云ひたる迄なり

加賀絹の湯文字に祇王祇女おされ (安永代)

さしも寵幸深かりし祇王祇女の二妾も佛の爲に御拂箱となり孰か秋に逢はで果つべきと浮世を觀じて嵯峨野の奥に隱退したとなるが加賀絹は時めく愛妾の緋縮緬に比すべくもあらざりしに却て押ッペしよられたとなり

うつり氣な坊主と嵯峨でわるくいひ (寶曆代)

三人が悟り入道肌さむし (文政代)

後又佛御前も秋の扇と捨てられて祇王祇女の後を追うて至り三人睦

じく庵の月が關伽の水に行ひ澄したとなり

おのしもし垂れはせぬかと祇女が母 (安永代)

入道の寵を失つた祇女の母が御前若し寢小便でもたれたのではないかと尋ねたとなるが妾の小便に關しては面白き慣習あり二三の句を以て説明すべし

消渴の氣味かと殿も初手はき (明和代)

大名などの妾に抱へられた女が吸取るだけ吸取つてそろく金毛九尾の尻を捲つて逃出さんと思ふ時には態と寢小便を垂れて向から暇を出させるやうに持掛けたといふ鼻持ならぬ悪習があつたとなりされば鼻毛を暢ばして續根惚れ込んで居る殿様が消渴の氣味かと尋ねたとなり

小便の癖に容貌美麗なり (明和代)

小便をするは玉藻の餘類なり (？)

小便をいめば器量がどつとせず (安永代)

など類句甚多し

御妾にちつと禁句な花の山 (文化代)

此處小便無用の洒落なり

小便に花をさかせる俳諧師 (文化代)

五文字たす迄は不興な金屏風 (文化代)

左文山(一説紀文)が醉興に此處小便無用の七字を燦たる金屏に書し其主の不興を招きしを晋其角が花の山の下五文字を加へて俳句としたとの有名なる逸話を柳化したる句なり

鳥居でも書くかと思や花の山 (？)

此所小便無用と書いたからその下に鳥居の繪でも描くかと思て居た

れば花の山の五文字を書いたとなるがこれは江戸當時の風習として小便無用の制札には鳥居を畫きたるものなればなり

通俗の小便無用鳥居なり (寛政代)

たれちらすところへ稻荷を勸請し (文化代)

以て類推すべし

お妾の夜具に鳥居を局書き (文化代)

ちとくと過るが此一句を添へて小便の打留となし更に妾に就て新らしき方面に入るの緒となすべし

孕む晩妾斬られた夢を見る (？)

斬られた夢は金が身に着く吉兆なりと云へば殿の御胤を宿として有卦に入るとなり

大名の借りる道具は腹ばかり (寶曆代)

榮耀榮華何一つ不自由なき大名も子供丈けは妾の腹を借りて産ます
となり腹は借物と云ふ俚諺を利かせてかく詠みたるなり

人質をもつた妾の口がすぎ (寶曆代)

若殿の拔殻奥ではゝをする (天明代)

二句同想異趣なり若様を産んだ妾が追々増長して人を人とも思はぬ
振舞をするとなるが妾を若殿の拔殻、若殿を人質と云つた所狂句な
るべし

鯉をうんだで兄様は瀧上り (滑稽)

妹が殿の御情を受けて若様を挙げたので兄までが御前の首尾目出度
く追々取立てられて立身するとなるが男の子を五月節句の鯉に利か
せて瀧上りと受けたるなり

八日には楊國忠へ加増なり (安永代)

玄宗皇帝長生殿に於て楊貴妃と比翼連理の語らひをなしてでれく
と目尻を下け給ひしは初秋七夕の晩とありさればその翌朝直に兄の
楊國忠に御加増の御墨附が舞下つたとなり持つべきものは好い妹な
り

七月の八日玄宗頭痛する (明和代)

類推すべし

倭言葉をおくびにも貴妃出さず (滑稽)

謠曲楊貴妃によれば妃はもと蓬萊山の仙女なるが假りに人界に降り
楊家の深窓に養はれたまゝ玄宗の目にとまりて後宮に召されその
寵を恣にしたとあり蓬萊は我國にある靈山とすれば貴妃は日本人に
あたる勘定なりされば倭にも日本語を遣はず何處までも支那娘に化
けて居たとなり

美しい顔で楊貴妃豚をくひ (文化代)

あの美しい顔をしながら支那一流の豚料理をくふかと思へば興がさめるとなり

さう申しや御合點だよと貴妃はいひ (天明代)

睦言を勅使へかたる美しさ (明和代)

同じく謠曲の語る所によれば貴妃再び蓬萊山に舞戻りて姿を隠したれば玄宗は手の裡の玉を奪はれたるが如く落膽ガツカリし仙術者に命じて其行方を尋ねしめたるにやつと蓬萊山にて捜し當て帝の切なき志の程を述べて再降を願つたれば貴妃も坐るに慙を催ほし記念の印として翳せる金釵を抜いて渡したりされども使臣それ丈けでは満足せず責めて帝と御身との外誰も知らぬ御言葉でも聞かし給はらば夫を證據に委細を奏聞せんと押して願ひたれば貴妃も致し方なく翠帳紅閨の睦

言に帝の宣ひし「天に在つては願くは比翼の鳥とならん地に在つては願くは連理の枝とならん」と云ふ詞を洩らし給へりとあり

勅答に天窓の飾一本減り (安永代)

玄宗は泣くく耳の垢をほり (滑稽)

類推すべし

尋ねにくいはいは小督より楊貴妃 (滑稽)

小督の事下の二三句によつて知るべし

月毛に乗つたきつとした文使ひ (天明代)

彈正少弼仲國帝より賜はりたる月毛の駒に鞭ち明皎々たる仲秋三五の明月を踏んで嵯峨野の奥深く隠退されたる寵姫小督局を尋ねて君の切なる御志を傳へたとあるを柳句にしたるなり

たそやこのと弾けば仲國戸をたゞき (文政代)

仲國局の隠家アゲを尋ね飽みたる時に孰れともなく聞ゆる嘈々たる想夫
憐の琴の一曲をたよりに其人を探がしあてたとあり

コロはてなシャンは、ありんこ、だわへ（？）

小督の琴の音と仲國とを頗る狂態にいへる句なり

御妾の書物象牙のしをりなり (寛政代)

象牙の撥を唄の本の棊にする御妾の素姓は言はずと知れた藝者上り
にてもあるべきか

御妾の書物めりやすばかりなり (明和代)

愈化の皮現はれたり、めりやすは此處では只短き長唄の類と解して
可ならん

お妾の聲二ヶ國へひいたの (明和代)

武藏と下總との間を流るゝ隅田川の屋形船にて兩岸に響き渡る美音

を張上げて唄つた女とあれば、いづれ柳橋か深川あたりのそれ者の
果とは言ふ丈け野暮なり

下總の花を江戸ツ子自慢する (文政代)

其當時隅田川の東岸は下總の領分なりしこと此句によりて明かなる
べし

駒下駄の本音をはくが妾なり (拾遺)

矢張り妾の素姓を素ッ破抜きたる句にて其時代江戸にては遊女賣婦
の外は駒下駄を履かざりしと見えたり次の句を見るべし

唐人の鬻でからく下駄の音 (文政代)

とりがなき歸りをおくる東下駄 (文政代)

旅は道連れ駒下駄で二三丁 (安永代)

三句共遊女にて甲は唐人鬻にからくを利かせ乙は朝歸りの客を送

るさま内は宿場の飯盛女なるべし

雀屋の世話でとんびが鷹を産み (文化代)

素姓卑しき女が立派なお部屋様になり若殿を産んだ事を鳶が鷹を産むといふ俚諺に掛けて云ひ更に縁類の雀を擔き出したる句なるが雀屋とは兩國橋の畔茅町にありて大名屋敷などへ奉公人の口入を業としたる店なり

雀屋も御宿はどこか聞いてとめ (文政代)

舌切雀の口調を藉りて雀屋をいへる丈けなり

御隠居をなされと口をへの字なり (寶曆代)

江戸詰の殿様の不行跡を城代の國家老が上府しての諫言なり

ほめられた娘家老にくがられ (文政代)

殿様にさへ可愛がらるれば結構なり

追髪を御腹に切らす國家老 (文化代)

殿の御胤まで宿した御腹に追腹ではなく追髪を切らして茶筌鬚の何とか院殿と祭り上るとなり

美しい受で國からしばアらく (寛政代)

殿様を卷込んで大それた謀計タクミを企てあはや事成就と云ふ間際に國元より駈附けた國家老暫くくの出になり三つ輪に被布の美しい敵役を閉へ口こませ善人榮え悪人滅び目出たしくの幕切れとなる所なるが受とは芝居語にて立物の相手をいふなり

暫が天窓をみんな横につけ (寶曆代)

市川家十八番の一、暫の出になり見物一同花道の方を向くとなり

市川の渡しししばらく待つてゐる (文政代)

市川と暫とを掛けたる細工に過ぎず

三甫右衛門一段高く無理をいひ (寶曆代)

寶曆十二年に死したる初代中島三甫右衛門といひ 役者は公家悪の名人にて特に暫の受は最も適役なりしと云ふされば上段の間に構へて憎て口をききしとなり

三甫右衛門北野へむかぬ役者なり (明和代)

蓋し公家悪中の時平なるべきか北野は菅公の廟社なれば歓迎されぬとならん

一舛が三百兩の餘にあたり (文政代)

一ヶ年給金千兩の市川團十郎の定紋は三樹なれば都合で千兩だとなり

定紋は二斗四升目の新之助 (文政代)

木場でくむ敷居のみぞも三筋立 (天保代)

共に同じく三樹の紋にて甲は八代目乙は四代目なり八代目は幼名新之助にて三樹八つなれば二斗四升にあたり四代目は深川木場に住ひたれば普請の材木にかけて三筋立の敷居といひたるなり

親玉の内はあれさと釣つて居る (安永代)

同じく洲崎あたりに釣をしながら木場の親玉の家を指し示したと云ふ丈なるべし

千兩は舞臺へ一人しをれて居 (天明代)

一人舞臺は平凡^{ヘツボコ}役者には勤まらぬ藝道なれば、孰れは千兩役者座頭株の大立物なるべし假へば鐵ヶ嶽を見送つて思案に暮れて居る猪名川とも見ば千兩の字にも響あつて一層面白からんか

替紋も川魚の玉花の玉 (?)

矢張り團十郎にて鯉と牡丹との紋をいへる句なり猶次の數句を参照

すべし

下女ひいき及ばぬ鯉の瀧上り (文化代)

鴻の池へも顔を出す江戸の鯉 (天保代)

甲は下女風情にて團十郎を最員にするなどは僭上の沙汰であるとなり乙は七代目が大阪へ下りたる時に鴻の池の旦那に引立を願うたと鯉と池とを組合せたる句なり

しもがれに荅を見せる福牡丹 (文政代)

これも七代目にて享和三年十三歳の子役にて暫の役を勤めて大當なりしと霜枯にて十一月の顔見世狂言を利かせたるなるべし前句替紋の説明までに添ふ

助六は江戸一番の頭痛持 (寶曆代)

雨降にばかり助六出たと見え (文化代)

助六も亦歌舞伎十八番の一にて紫縮緬の鉢巻をなし蛇の目の傘をさして出る故かく詠みたるなり江戸一番は江戸に肩を双ぶるものなき俠客を隨市川に掛けて云へるものならん

先箱で出る助六は割下水 (寛政代)

助六の紋所を蟹牡丹としたるは蓋し市川家の替紋を取り用ゐたるものなるべきか此句は牡丹と云ふ代りに助六と云ひたるものにて金紋先箱で練出す牡丹は花川戸ではなくして本所割下水の津輕公なりとなり

陸奥の果は牡丹の畑なり (文化代)

御府内も東の果は津輕なり (文化代)

此二句以て津輕家の紋は牡丹にして江戸の東の隅にその屋敷ありたることを明にすべし

道中に廿日もかゝる牡丹なり (文化代)

津輕から江戸に參勤するには二十日も掛ると牡丹の異名二十日草を利かせたる句なり

薪水は毛を引いたのを紋につけ (寛政代)

薪水は阪東彦三郎の俳名なるがその定紋は羽根のなき光琳風の揚羽鶴なれば毛を剝つたやうなと云ひたるなり

百姓の作り上げたる菊之丞 (天明代)

もちつとで路考は馬を追ふところ (文化代)

安永二の三月に歿したる瀬川菊之丞乃ち二代目路考はもと王子在の百姓の子にして當時王子路考などと稱せられたる名優なりし故に此句あるなり

人の波うつは舞子の濱村屋 (文政代)

はま〜と舞子をほめる江戸道者 (文政代)

此二句表面に舞子濱の風光を掛けて裏面に濱村屋乃ち路考の人気満都を騒がしたることを詠みたるなり後世「はま〜」と云ふ賞め詞あるは路考より始りたる語なりと聞けり

橋中の座でひろめたる仙女香 (文政代)

支那の故事に橋を割りたれば仙人ありて碁を圍み居たりとて碁客の事を橋中の仙人などと呼ぶなりされば市村座にて路考仙女香と云ふ化粧品を賣弘めたることを六つかしく云ひたる句なるが今日の美顔水などの廣告に役者を擔き出すが如く昔も化粧品の提灯持には多く役者を頼んだものと思はる橋のこと次の句を見るべし

右近の橋左近の銀杏なり (?)

葺屋町の市村座堺町の中村座は二丁町と稱へて兩々相對したる江戸

の大芝居なるが市村の櫓紋は丸に橘、中村のは隅切角に銀杏鶴なれば紫宸殿に擬へてかくいひたるなり

橘と銀杏は金のなる木なり (文化代)

表面に曇々たる黄金色の果實が登るさまを掛けて裏面には此二座に日々大金が落ちると云ひたるなり

夜と晝朝とへ落ちる日千兩 (文化代)

吉原の夜と日本橋の朝河岸と芝居との三つを云へる句なりと聞けり前句金のなる木の意以て明かなるべし

陸續は母にすゝめて市村座 (?)

孝子陸續なる人袁術と云ふ人の家にて母の好める蜜柑を盗み袂から轉げ出で、見尤められ却てその至孝を知られたと云ふ談あるより蜜柑好の母をつれて市村座の見物に行つたと橘を隠して詠みたるなり

八ツ口のあひから孝がころげ出し (文政代)
類推すべし

紫宸殿左は忠義右は孝 (文化代)

左には櫻右には橘があるとなるが橘は前句の通り櫻は我朝の兒島高德なり

木挽町まづかるかやで屋根もふき (文政代)

木挽町の河原崎座は最初は他の二座に比すれば聲價甚だ振はず田舎芝居の如くに思はれ居たるが文政の頃上方より初代訥升を呼迎へ蒞萱道心を演じて大入大評判を博せし以來江戸の三芝居と併せ稱せらるゝ格に進みたりとあり

吳魏蜀の一つはなれて木挽町 (明和代)

三國鼎立の勢に見立て、河原崎座のみが遠く隔たり居たれば蜀の國

に擬してかく詠みたるなり

木戸番の天窓で結ぶ頬かぶり (明和代)

江戸時代三芝居の木戸口に舞臺野郎と稱へるものありて長さ五六尺もある手拭様のものを腮より天窓の頂邊テツペンに掛けて結び扇を擴げて舞臺々々舞臺やらうと叫びながら客を呼込んだものなりとさる古老の談に聞けり

顔見世の木戸番首がさかさなり (天明代)

類推

長じけにかつばの乾く芝居町 (?)

木戸の前に立ちて通行人などの袖をひいて入場を勧めたるものをつばと稱したり引込む故に河童とも又晴天にても常に合羽を纏つて居た爲めとも云ふ兎も角長雨には濕める筈の河童が却て乾わくと雨

天續きの不入を云ひたるなり

見物も通を失ふ 糸が所作 (文政代)

久米の仙人は衣濯ぐ美女の脛を見て通力を失ひ下界に墜落したとあるに中村糸太郎の所作事には見物人の方が魂を奪はれて夢中になるとなり糸太郎は所作事の名人にて寛延元年中村座にて娘道成寺を勤めて古今の大入をとりたる役者なり

知つたふり杜若が内は三河町 (文化代)

杜若は岩井半四郎代々の俳號なれが杜若カキツバタなれば三河町さとは成程知つた振なり三河と燕子花との事は例の在五中將在原業平朝臣の折句に胚胎せること次の數句によりて明かなり

二人とは仕立手のないから衣 (安永代)

業平東下りの途次參州八つ橋にてかきつばたの五文字を折つて「か

ら衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬるたひをしそおもふ」の一首を詠じたとは人の知る所なりされば業平一人の外かゝる名歌を作り得るものはなしとなり

かきつばたけだかいざいご者が折り (天明代)

しきしまの道草に折るかきつばた (文化代)

在郷者を在五に言ひ掛けたるものなり餘は類推すべし

河敷に五つよけいな橋をかけ (滑稽)

三河に八橋は五つ多すぎるとの洒落に過ぎず

吉の字の上唇が黒うなり (天明代)

役者評判記などに吉、上吉、上々吉など書くとき初めは吉の字を白字にしておき次第に評判よくなるにつれて先づ上半を黒く染め終に全體を黒字となすの慣例なりし故なり

吉といふ字の幽霊は安芝居 (文政代)

幽霊は白しの義他は類推すべし

吉の字の黒いはなには火がとぼり (文化代)

次の二句にて考ふべし

蠟燭を二挺にらめるいゝ役者 (文化代)

立者は魚蠟かぎ／＼はねまはり (明和代)

當時の芝居にては例の面明又、さしだしとて長い柄の手燭に魚油にて製したる蠟燭を點し役者の顔の前に差出したるものなれば此句あるなり

黒吉の顔が持参でまつ裸 (明和代)

極上飛切りの美貌カホホを持参として丸裸で嫁入するとなり次の句参考すべし

金持へ裸まゐりの美しさ (天明代)

い、くらし裸で嫁が天下り (天明代)

天女のような美人が大金持の器量望の内へ仕度なしの赤裸々にて興入れしたとなり

福山は樂屋へそさうかつぎ込み (文化代)

役者舞臺にて臺詞を忘れ絶句などしたるときはその罰として樂屋中に蕎麥を振舞ふの不文律ありされは舞臺の粗相が蕎麥となつて樂屋に擔ぎ込まるとなり福山は蕎麥屋の名なり

舞臺の笑三階へ福來る (文化代)

笑ふ門に福來るの俚諺を利かせて相中以下の大部屋に蕎麥屋の箱が入り來るとなり

間のわるい役者蕎麥屋の一旦那 (文化代)

せりふのつなぎのびたのが蕎麥になり (文政代)

類推

嫁の髪酒呑童子の時分出來 (寶曆代)

中村勘三郎座にて芝居開演中には毎朝未明に大江山鬼退治的一幕を出すを式例としたりとされば不斷は朝から晝迄もかゝる花嫁の髪も芝居行きの日丈けは夜明け頃迄にはちやんと出來上つてゐるとなり

大江山齒の根もあはぬ棧敷番 (文政代)

お養へに酒もつて行く大江山 (文政代)

頼光の大江山に掛けて芝居見の仕度をいへるなり但し「おにしめ」に鬼討取を掛けたり

四天王金剛杖でいがをむき (寶曆代)

源の頼光、渡邊、坂田、白井、平井の四天王を率いて大江山の鬼窟

に入り計畧を以て童子以下の山賊を討伐したとは御伽噺にて誰も知る通りなるが金剛杖にて山伏を利かせ栗の毬果イガにて丹波の國を言外に隠したる句作なり

洗濯で留守かとおもふ四天王 (文化代)

山伏姿で大江山に向ふ途中に鬼の爲に生捕られたる緋の袴の官女達が谿川に洗濯をなしつゝありたるに逢ふて途案内をさせたとあり此句は鬼の留守に洗濯と云ふ俚諺を利かせた丈けが生命なり

山伏に度々化ける源氏方 (安永代)

大江山と安宅の勸進帳とをいへるなり

霜月の化粧十月髪を結ひ (天明代)

當時芝居道の慣例として十一月一日に顔見世狂言を開場し明けて初芝居とて春狂言を出したるものなり、されば朔日早朝に入る髪を前

月の晦日に結つて置くとなり

霜月の朔日丸は茶屋でのみ (寶曆代)

此茶屋は芝居茶屋にて顔見世に出掛けて来た女を詠みたる句なり朔日丸とは血の道の薬にて毎月々の始めに一服づゝ飲んで置けば其月中には如何なる事あるも屹度經水通ずると云はれたる誠に重寶なる御藥なり

持藥さと朔日丸を後家はのみ (寶曆代)

下女こりて月に一筋づゝが飲み (文化代)

説明に代へて添へ置くのみ一筋は錢百文のことなり

霜天に満ち三角な雪がふり (寛政代)

霜と出て雪と受けたる細工なるが同じく顔見世狂言なり三角の雪次の句を見るべし

此世界ばかり降るなり三つの花 (文政代)

芝居の雪は三角に切りたる紙なれば六つの花ではなく三つの花だと洒落れたるなり

三角な雪見お犬がうれしがり (文化代)

お犬は御犬小供などと稱して大奥の女中などの小間使を云ふされば雪の伯母と云ふ諺さへある程雪を好む犬にかけ、御犬が芝居の雪見を嬉しがるなり

品のよい棧敷つもつた雪のやう (寛政代)

此雪は御殿女中の椎茸鬘を包んだ真白な絹帽子を形容したるものにて棧敷敷間をぶん抜きのずらりつと並んだ模様を詠みたるなり

みやげをば身振で咄す長局 (安永代)

三芝居見たでとりまく長局 (明和代)

宿下りに芝居を見て来た女中部屋の有様を叙したる句なり

雷藏に宵からひかる長局 (天明代)

天保代の給金附には河原崎座附市川雷藏十兩三分三匁とあれど此句は天明代の句なれば恐くは先代にて今少し地位の高き立物なりしならんと思はるれど調ぶるに由なし要するに御殿女中に最員多かりしものと見えて雷藏の出勤する芝居見物には前晩から紅や白粉の御化粧にて大騒をなすとなり雷と出て光ると受けた所に細工あるものと知るべし

濡事を眞事にしたで島へ行き (明和代)

後に森田座と改めたる當時の山村座附の役者生島新五郎なるもの大奥の女中江島に通じ正徳四年事發覺して八丈島へ流罪に處せられたることを詠みたる句にて舞臺でやるべき濡幕を實地に演じて八丈島

へやられたとなり

箱入の男が来たと島でいひ (?)

長持の中に忍ばせて大奥へ連れ込んだとの説より箱入の語を用ゐたるにて島は八丈島の住民をいふ

色男四角な知慧で奥へよび (寶曆代)

長持へ入れると云ふ知慧を出したとなり

美しい流人大飯食になり (明和代)

生島は八丈へ流され相方の江島は信州の山奥へ配竄せられて一件落着に及びしとあれば美しい女中が大飯食らひの信濃者と成つたとなり

喰ふことも武勇も眞田人に越え (明和代)

眞田幸村は信州上田の城主昌幸の次男なればもとが信濃の喰らひ拔

けなりとなり次に信濃者二三句を擧げて類推に便す

彦七が苗字をおしな五杯くひ (文化代)

大森を大盛に掛けて云へる丈の句なり於信濃は信濃者の異名なり

ふる里寒く大飯をくひに出る (文化代)

初雪やこれから江戸へくひに出る (天明代)

ソロ／＼雪が降り出して農閑の頃となれば信越地方の農民ゾロ／＼と江戸へ押出し米搗などをして稼ぎ翌春暖季になれば再び本國に歸り去る之を稱して棕鳥と云ふなり

棕鳥も毎年來ると江戸雀 (文政代)

年々來るうちには次第に江戸の馴つ子となるとなり雀とは吉原雀宮雀などの雀と同じくその土地に馴れて居附くといふやうな意味にて只棕鳥を受けて雀といひたるのみなり

信濃から来て名月を一つ見る。(天明代)

江戸には田毎の月はないとなり

ひめのりありがぬつと出て拍子幕 (文政代)

芝居の火入の月は曲げものの両面に赤紙を張りたるものなれば恰も
姫糊ありと店にぶら下げた看板に似て居るといふ丈けなり其無細工
の御月様がギリ／＼と日覆からぶら下がるのが爲知シラセにてちよん
と幕切れの拍子木が這入るとなり

貝がらが鳴くと道風にらみつけ (文化代)

芝居の蛙の聲はがさ／＼と蛤の貝殻を磨合はせて真似るものなれば
小野の道風が柳の條に飛上る蛙を見て傘を肩にかけてぐつと見え
するとなり

先づ今もいひきらぬのにどうろどろ (文化代)

頭取が出て先アづ今日は是切りと云ひ切らぬうちに見物はどろ／＼
と立ち掛ると云ふ丈なり

下さじき餌をくふやうに首を出し (天明代)

當時の二階棧敷の下は横木を渡して鳥籠の如く見えしと云へば今日
の鶉とは餘程趣を異にしたるものなりしとされば首を出して餌を食
ふと云ひて態と鶉を隠したる句なり

鶉から呼んで鸚鵡を買つてゐる (文化代)

鸚鵡石として當り狂言の役者の假聲コウイロを版行したるものを賣りたるもの
なれば此句あるなり

稻荷から出世鳥居の筆になり (文政代)

芝居の樂屋に稻荷を勸請せる所ありその片側を稻荷町と呼び向側の
囃子方の詰居るはやし町と合稱して兩側とも云ふなりさて稻荷町の

下等役者も追々藝道上達して元祖清信の一派を開きたる鳥居流の繪看板に出さるゝやうに出世したと稻荷に鳥居の縁語をひきて詠みたるなり

地名にあらず 囃子町 稻荷町 (文化代)

給金もお初穂ほどな 稻荷町 (文化代)

類句としてあげおくのみ

おもしろい日を急用が白くよび (?)

芝居見物の人に急用起りて面會を要する時には木戸番に頼めば黒札に胡粉を以て何某様木戸迄急用と書いて舞臺正面の破風などより吊下げたるものなれば此句あるなり

かんじんの時に胡粉で書いて出し (明和代)

急用のあとであぐらを一人かき (安永代)

類推

樂屋ではばくち鎌倉の諸大名 (寛政代)

曾我の對面などに出る三浦島山など大勢の並び大名は通例稻荷町あたりには振當てらるゝ端役なれば舞臺にては烏帽子大紋の立派な大名なれど樂屋にては博奕など打つて居るとなり

三階で姫君肌をぬいでゐる (寛政代)

同想異曲の類句にして三階は相中の部屋なり

三階に家なし小つめ女形 (文化代)

三階を三界に掛けたる語呂にて小詰とは下立役のことなり

死にさうな場所へ毛氈出してあり (安永代)

舞臺にて殺されたる役者に引被ぶせる赤毛氈なり

人魂で草履をさがす樂屋番 (文化代)

妄念の火に酔うてゐる道具方 (文政代)

芝居にて幽霊の火はうすどろの焼耐火なれば暗い處にて物を捜すに用ゐられたり左利キの道具方はそつと一杯ひつかくるとなり

龍頭に手をかけやすくと樂屋ばん (文政代)

道具方岩をちぎつて鼻をかみ (寛政代)

荒海や闇を着て寝る樂屋番 (文化代)

張拔の釣鐘や岩石や或は浪幕黒幕などの樂屋道具を詠みたる句なり

せり出しの山は近江の細工なり (文政代)

文化文政の頃近江屋久四郎といふ大道具方の名人ありたりされば富士山と琵琶湖とに掛けて近江の細工で大きな山がぬつとせり出したと云ひたるなり

せり出したお山孝靈五ツ月日 (文政代)

孝靈天皇五年に一夜の中に富士の山が出来たといふ傳説を妊娠オヤの女郎に掛けて云ひたるなり

孝靈五あふむくものにのぞくもの (?)

富士が飛出した一方には近江の國に琵琶湖が湧き出てたとあればなり

近江から駿河へ嫁入る綿帽子 (文化代)

されば近江の土を以て富士を築き上げた勘定になる譯なれば雪の綿帽子にかけて近江から駿河へ嫁入るといひたるなり

赫耶姫俗名おふじ様といひ (寶政代)

雪の綿帽子を額に戴けるおふじ様の本名たる赫耶姫は大勢の公卿にかき口説かるゝを五月ウツル蠅サがり不老不死の薬を残して月宮殿へと昇天したれば後人その薬を富士の絶頂に持ち行きて燃やしたる烟が燄々

と後の世まで薫^{ツク}り居るのだとは竹取の翁の話にあり

舊宅は天女へゆづるさくや姫 (文政代)

富士山上に咲耶姫を奉祀せる所より此句あるなり舊宅とは琵琶湖にて天女とは竹生島の辨財天なり

摺鉢の上にお鉢をのせておき (文化代)

表面臺所に薯蕷汁でも搗つた所のやうに見せて裏面には矢張り富士山を詠じたる句なり搗鉢を伏せて眺むるやうな三國一の富士の頂上には八個の峻峰環列して所謂八朶の芙蓉峰をなせるものにてその八峯の内の凹處を御鉢廻りと云ふなり

富士の夢裾分をする 獺仲間 (?)

獺は夢を喰ふ獸なりといふより大きな富士の夢を配分して喰ふとなるが富士に縁語の裾といふ字を利かせたる所此句の生命ならんか

富士山も目出度く見れば目は入らず (明和代)

正月二日の初夢に見る富士の山なれば目は入らぬとなり

初夢を大師の連に判じさせ (明和代)

日本風俗史によれば正月三日は慈惠大師の忌日に當るを以て京都にては比叡山江戸にては東叡山に參詣するもの多しとありされば二日の晩の初夢を三日の朝詣の連に談して判斷を乞ふとなるべし

裾野から夢のゆかりを御献上 (文化代)

當時富士山の麓なる久能山附近より江戸將軍家へ初茄子を献上したるものなれば紫^{ユカリ}の色の三茄子を一富士の裾野から献上すると夢占の語を用ゐて詠みたるなり

茄子通る頃は八里の山櫻 (寛政代)

八里は箱根にて献上茄子の通る頃やつと山櫻の花が咲くとなり

提灯と曆焼芋ほどはなれ (文政代)

提灯は小田原、曆は三島にて兩宿は八里の峻嶮たる箱根山を隔て、其麓にあれば其間がざつと八里半程あるとなり焼芋の味は栗(九里)に半里足らぬと云へばなり

七里では牛八里では馬でこし (文政代)

鎌倉七里ヶ濱は牛に乗り箱根八里は馬に乗つて越すとなり

藤綱は馬鹿と七里の濱童子 (天保代)

七里ヶ濱のほとりに多くの漁民の子供等集り江の島遊覽の客に乞うて海中に錢を投せしめ直に飛込んでその錢を拾ふこと中々の見ものなりと、されば滑川に大勢の人夫を備うて錢を探らせた青砥左衛門藤綱は餘つ程馬鹿だと此川の出口の小供等が笑うたとなり

相州を青砥で切磋琢磨する (文化代)

相州正宗の名刀を青砥石に掛けて研くとは表面にて第二義は鎌倉の北條氏は青砥といふ賢臣の補佐獻策によりて大に光りを放つたとなり

なまくらな武士に青砥はあはぬなり (安永代)

同想異曲にしてなまくらは鎌倉の語呂なるべし

菊一文字とそり合はぬ相模もの (?)

菊一文字と相州正宗と反が合はぬと表に刀の事を現はして裏に上皇と義時との確執を隠したる句にして菊一文字は備前則宗これを打ち後鳥羽上皇自ら焼刃を入れ給ひ一名刀なり

義時は違勅の罪でござりやす (安永代)

北條義時は勅命を奉せず上皇を隠岐の國へ流し奉りしとあればその寵妾たる龜菊の心を詠みたる句なりござりやすなど下卑た詞を用ゐ

たるは龜菊はもと京都の白拍子なりしことを臭はせたる細工なり

六十は明月百は時雨なり (天明代)

源氏物語六十帖は紫式部が石山寺に秋の明月を眺めながら書き小倉百人一首は定家卿が時雨の亭にて書いたとなり

人こそ知らね頼政が娘なり (寛政代)

「我袖は汐干に見えぬ沖の石の」と詠じたる讃岐と云ふ女の素姓を知つて居る人は少ないが實は三位頼政の娘であると下の句の「人こそ知らね」を掛けていひたるなり

二三日間がありや相模うらみわび (明和代)

これも百人一首中にある相模の「うらみわびほさぬ袖だにおるものを戀にくちなん名こそをしけれ」の起句五文字を繕り來りて二三日逢はねば相模が怨を云ふとなり相模とは下女の異名にて柳界にては

大立物なり

しくじつて二十里かみへ下女かへり (明和代)

江戸に下女奉公に出る女は多く相模女にて至つて尻の軽い性質タチなりしこと類句山程あれども説明し難きもの多ければ略することとしたり二十里上とは相模を隠して云ひたる詞なり

定家の門に鶯泣いてゐる (天明代)

小倉山の山莊にて定家卿の選ばれたる百人一首中には杜鵑も居れば山鳥も居り其他鷄も鵲もいろ／＼の鳥類あれども鶯を詠じたる歌は一首もなしされば鶯は定家に向つてその無情を訴へて泣いてゐるとなり

鶯も蛙も鳴かぬ小倉山 (文化代)

百人一首中には蛙の句も見當らぬとなるが古今集の序に「花に鳴く

鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるもの孰れか歌をよまざりける」とあるを引用して鶯と蛙とを擔き出したる作者の苦心多とすべきなり

鶯の歌は春の序古今の序（？）

古今の序は前句の通り春の序とは春告鳥とて春に入れば先づ序開きに鳴くものなればなり

六人の天窓をこきんくはり（文政代）

古今を天窓を打つ音のこきんに掛けて古今集の序に僧正遍昭は歌のさまを得たれども誠少し、たとへば繪にかける女を見て徒に心を動かすが如し大伴黒主は心は高くてそのさまいやしいはば薪負へる山人の花の蔭にやすめるが如しなど片ツ端より六歌仙を痛罵して一歩も假さぬところを詠みたるなり

薪負ふ人は登らぬ小倉山（文政代）

百人一首中に大伴黒主なし出所前句の解を見るべし

赤人を白妙にした新古今（文政代）

萬葉集にある山邊赤人の「田子の浦ゆ打出て、見れば眞白にそ富士の高ねに雪はふりける」とあるを新古今には「眞白にそ」を「白妙の」と出しあると云ふ丈にて只難句と云ふ外に格別妙味なき句なり

百人で九十九人は蛇におぢ（安永代）

蟬丸といふ蛇に怖ぢぬ盲が只一人あるのみとなり

雷も天狗もまじる百人一首（安永代）

雷は菅家天狗は崇徳院なるべし弓張月などに爲朝屠腹せんとするを院の使ひ者と云はるゝ天狗が大勢飛來つてとどめて居る圖などある

を見ても知るべし

象に坐す神も御鼻が長いなり (滑稽)

讚州象頭山に鎮座まします金毘羅大権現には崇徳院を合祀しあれば天狗を隠して鼻が長いと云ひて象の字に利かせたるなり

青天になりそこに時こゝに平 (文化代)

洛中は夫とも知らず蚊やをつり (拾遺)

菅公讒者の爲に大宰府に配せられ給ひ憤懣の極天拜山に登りて天告文を捧げ天雷に化して時平を一撃のもとに震死せしめ給ひしとは濃厚篤實なる菅公に取つては甚だ迷惑千萬なる俗説なるがその時京都中の人々が時平を追廻はす雷公とは知らずに蚊屋を吊して畏縮したと詠みたるなり

ひどいのに法性坊は道で逢ひ (拾遺)

僧正の七尺あとへおつこちる (文化代)

公家はしをかけて僧正よびたてる (安永代)

般々轟々天地も崩れんばかりの迅雷に帝を初として宮廷の百官怖れをなし人橋ならぬ公家橋を掛けて時の高僧法性坊を呼迎へ鎮雷の御祈禱を命せられたとなるが僧正の未だ宮中に行き着かざるに先だち時平震死したれば途中にて劇しいやつに出ツ會したらうとなり有繫に菅公程あつて七尺去つて師の坊の影を履まぬ所は作者の用意と共に周到なる事と云はんか

其頃は法性坊と書いて張り (拾遺)

其時分雷除の御符に法性坊と書いて張つたとなり

來ぬ人を入れて百人にする都合 (文化代)

「來ぬ人をまつほの浦の夕風にやくやもしほの身もこがれつゝ」の一

首は定家自身の歌なれば九十九人揃つて一人足らぬから來ぬ人を加へて都合百としたと面白く詠みたるなり

九十九は選み一首はかんがへる (天明代)

類推

うれしいねまつほの浦がきゝいした (?)

戀人を待つときに此歌を三度心の中にて吟ずれば其人必らず來るとの迷信ありされば效いしたと吉原語を用ゐて客を嬉しがらする女郎の手管を云へる句なり

百人は言葉もかけぬ花の兄 (文化代)

花の兄とは梅の異名なれば百人一首中梅を詠じたる句は一首もなしとなり然れ共紀貫之の「人はいざ心もちらす故郷は花を昔の香にほひける」の花は梅なりとの説あるを聞く此句の當否は讀者の考に

まかす

奥山とかぐ山の間に富士の山 (滑稽)

持統天皇の「衣ほすてふあまのかぐ山」と猿丸太夫の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の」との間に山邊の赤人の「富士のたかねに雪はふりつゝ」の句があるとなり

兩脇に月の出である有馬山 (文化代)

大貳三位の「有馬山」の歌は前に紫式部の「雲かくれにし夜半の月哉」後に赤染衛門の「傾くまでの月を見しかな」の二つの月にて挾まれて居るとなり

京都では衛門江戸では式部なり (寛政代)

赤染にて京都の紅 式部にて江戸の紫を利かせたるなり

紫はまんま鹿の子は粥でそめ (寛政代)

上方者の吝嗇を嘲りて京の茶粥など云ふ詞あるより江戸紫は十分に飯を喰つて威勢よく染め上ぐるが、京鹿の子は御粥の腹にて力なく染上ぐるとなり

江戸ならば深川邊に喜撰住み (文化代)

「我庵は都の辰巳鹿をすむ」と云ふより江戸であつたら大方東南の隅にあたる深川邊に住んだであらうとなり深川を辰巳と云ふこと梅暦などにて粹様先刻御承知の筈なり

茶ののめる庵は都の辰巳なり (安永代)

喜撰と云ふ茶の銘を利かせて深川方面に名高き俳人の住みたる事を云へるものならんか俳諧中興の祖松尾桃青の住みたる芭蕉庵はその附近にありたりと聞けり江戸砂子蟠龍山長慶寺の條下に芭蕉、其角、嵐雪の墓ありと記し且つ芭蕉筆跡の短冊を築き込めたる故に短冊塚

と云ふ云々と付け加へてあり参考のため附記す

業平と喜撰はかりと楸でうり (文化代)

本所業平橋の蜺は味最も美にしてその地名物の一なりされば蜺と茶とを二人の歌仙に掛けてかく詠みたるなり

およしよと云はず小聲で春の夜は (文政代)

春の月のよき夜二條院にて人々物語などして通夜したる時に周防内侍轉寢して枕ほしやと私語きたるを聞きて大納言忠家抜目なく御簾の下よりぬつと我腕を差出しこれを枕にしたまへと言ひたれば内侍取敢へず「春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ」と遣つて除けたとあり、されば内侍が御廢なさいと云はずに春の夜はと唸り出したと狂じたる句なり

待宵の晝まで只の侍従なり (滑稽)

石清水の別當法印紀光清の女小侍従は待宵と後朝とは孰れが苦痛かとの皇后の御尋に對し奉り「待宵にふけゆく鐘の聲きけばあかぬ別れの雞はものかは」と即吟の歌を以て御答申上げたれば其時より待宵の侍従と呼びはやされ才名嘖々として後の世までも傳へられたりとありその晝迄は只の小侍従であつたとの理窟に過ぎぬ句なり

馬はものかはと品川よむところ (安永代)

東海道五十三次の筆初めなる品川は宿場の事なれば未明より馬の嘶く聲に妓樓の温き夢を破られ後朝の袂を別つはつらしと小侍従の歌を藉りて雞の字を代へて馬は物かはと洒落れたる句なり

遍昭はもう一ぶくと空へいひ (天明代)

「天津風雲の通路ふきとちよ乙女の姿しはしとめんと云ふより雲井遙に飛んで行く天女に向つて今一服吸付けてくれと言つたとなり

遍昭の女郎花の歌とて名高きものあるよりそれこれを搗き交せてかく遊客めきたる詞を用ゐたるものなるべし次の句参考すべし

落馬にもこりず乙女をよびたがり (滑稽)

遍昭の「名にめて、折れるはかりそ女郎花われおちにきと人に語るな」と云ふ歌あるより繪などにては遍昭が馬から落ちた所などを描いてあるが歌の心は如何なる事にや其處までは柳界にて詮義の要なしとして兎も角落馬と極めて乙女の姿を結び付け一句としたるなり

親の爲我れ落ちにきと女郎花 (文政代)

われ落ちにきと語るなと後家はおち (?)

その歌の語呂を取りて甲は身を賣りて苦海に沈める遊女の述懐乙は墮落後家の口留めをいひたるなり

百人の天窗の上にしつけかた (寛政代)

しつけ方迄が定家の作のやう (文化代)

百人一首の上の欄には通例女大學だの婦女庭訓だのと女の守るべき道などを書きたればなり

智ではじめ徳でをさめる小倉山

初めが天智天皇で終が順徳院といふ丈のことなり

はゞきいの捨子と見えて見えかくれ

坂上是前の歌に「その原やふせ屋におふるはゞぎのありとは見えてあはぬ君かな」との歌を藉り來りて帚木を母の氣と秀句に詠みて子を捨てた母の情を云ひたるなり

舊都の名歌八重ざくら山櫻 (滑稽)

伊勢の大輔の「いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重にほひぬるかな」と薩摩守忠度の「さゝ浪や志賀の都はあれにしを昔なからの

山櫻かな」の二首を搦き交せて我國の舊都たる滋賀と奈良とを二様の櫻にてよみたる句なり

詩歌の櫻なきにしもあれにしも (滑稽)

歌のあれにしもは前項の通り詩のなきにしもは兒島高德の天莫空句踐時非無范蠡なり

千載に日陰の櫻一本入れ (寛政代)

前項さゝ浪やの一首は忠度勅勘の身なれば憚りて讀人知らずとして千載集の中に俊成卿の選入されしことを詠みたるなり

雛棚のしがをかくすも山櫻 (文化代)

これは雛棚の見苦しき所に大きな山櫻の枝を樹てゝその檻樓を隠すとなるが「志賀の都はあれにしを」とあるより荒れたる内裡を志賀にて利かせたるは聊か無理かと思はるれど下五文字の山櫻より推せ

ばかく解するより外はなからんか

濱萩を他國の名にて伊勢はよみ (寛政代)

「難波潟みしかき蘆のふしのまもあはて此世をすこしてよとやは伊勢の歌なるが難波の蘆は伊勢の濱萩と云ふ俚諺もあれば伊勢ならば一體あしと云はずにはまをぎと云ひさうなものだとの理窟なり

山吹のちはぬれまじものと詠み (文化代)

「いそかすはぬれましものを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨」これ太田道灌の作として世に知られたる歌なるが道灌例の雨宿りに少女が差出した一枝の山吹に其意を曉らす大に恥をかいて奮起し歌道に入つて終にその蘊奥を窮めたとは人の知る逸話なれば此句ある所以なり

晴間を待つは古歌を知る雨宿り (?)

類推

蓑一つあるとやさしい名は立たず (文化代)

「七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞかなしき」の古歌を山吹の一枝に擬へて優にやさしき名を揚げたるも若し其時に貸すべき蓑笠でもあつたら、さる雅名は立たざりしとなり

道灌も金を貸せかと初手思ひ (滑稽)

金を貸せではない馬鹿め蓑をかせ (文政代)

氣の利かぬ人と山吹おいてにげ (寛政代)

三句互推せば解説を待つ必要なかるべし

山吹をかさず藏宿傘をかし (文化代)

藏宿又札差とも稱へ浅草御藏前にありて旗本の侍などに祿米を拂ひ渡し或は夫を抵當に金などを貸附くる町人にて始終武家の出這入る

内なりされば途中にて雨にあひたる侍が立寄り都合次第にては金でも貸りて北國征伐にでも出掛けんかと思つて居るに山吹色の小判は差出さず傘を貸すとはさてく氣の利かぬ主人だとなり

お藏前ぬれて通るは地方なり (天明代)

地方チカタとは知行する采地ありて直接に祿米を取り藏宿の手を経ざる侍をいふされば平素の交際なき爲立寄つて雨宿りもする譯にゆかぬとなり

玉にきず藏宿を出て猪牙にのり (寛政代)

旗本の二男とも見れば見るべきか武道文藝何一つ申分なき若殿様なれど祿米代金を受取つた其足で山谷堀方面へ猪牙の鼻を向ける丈が玉に疵だとなり玉とは渡り米の事にてそれを彈丸に利かせて猪、疵などの縁語を絡みたる句なり

玉となり落るももとは民の汗 (文政代)

玉又玉落といへば此句あるなり

米さしは船宿にでも置けばよい (寶曆代)

米刺は竹筒の先を斜ハスに切り俵に差込んで善惡を吟味するため見本米を引出す道具にて米商人などの腰に差して常に携ふるものなりされば此句は藏宿の旦那か乃至は伴頭などが商用の出先にて仲間に行合ひ吉原行の相談にてもなすさまと見て然る可からん

江戸紫の下染は桔梗なり (文政代)

江戸名物の紫染は最初に先づ桔梗色に染むるとは表面にて裏面には今日の千代田城の繩張をしたのは太田道灌なりと詠みたるなり江戸砂子によれば人皇百三代後花園院の長祿元年道灌此地を卜して居城を築きしとあり偕て桔梗は太田家の定紋なり

山吹へ濡れてかけこむ桔梗笠 (？)

山吹と桔梗とを對照して同じく持資の雨宿りをいへる句にて桔梗は其紋と其頃遊獵の時に被りし綾蘭笠の異名なるとを利かせたるなり

いざたちわつて養てくはん鏡餅 (文政代)

大伴黒主の「鏡山いさ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると」を地口^{ヂグ}りたる迄の句なり

草履打ちいざ立よつて見てゆかむ (寛政代)

鏡山を隠して草履打として黒主の歌を裏とし表に芝居前のさまを詠みたるなり鏡山の狂言は奥女中の宿下の時期にいつも演せられたるなり

百にない鏡を六歌仙へ入れ (寛政代)

前の歌を百人一首に選ばずして六歌仙に入れたと云ふ丈なり

萍に十二ひとへの腕まくり (拾遺)

黒主との歌合に小野小町の詠じたる「まかなくに何を種とて浮草の波のうねく生ひ茂るらん」の一首を立聞きしたる黒主はとても我技倆にては此れにまさる名歌を詠み出づることは思もよらずと胸に悪計を企て人知れず此歌を萬葉の中に書込み古歌剽竊なりとの汚名を被せ玉座の前にて小町を恥ぢしめんと計りしに小町のために萬葉の墨を洗ひ落とされ却て面目玉を踏潰したとは双子洗とて有名なる譚なりされば十二單の重衣の袖を捲つて耳盥の中で洗濯したと詠みたるなり

秀詠のねたみにも出るつの盥 (拾遺)

前項のことを妬と角と縁語を用ゐていひたるに過ぎず

歌の白波萍のねなしごと (拾遺)

これ亦盜賊を白波に掛け、波に萍を配し萍に根なしの語を添へ暗に
双紙洗の一件は實際になき訛傳なりと詠じたるなり

うねくは盛り落めはさそふ水 (文化代)

波のうねくを詠じたる頃は才名噴々小町全盛の時代にして「わひ
ぬれは身をうきくさの根をたえて誘ふ水あらはいなんとそおもふ」
の一首は悲運慘憺小町落ちめの頃に詠みたるものとあれば同じ萍に
も榮枯盛衰ありと云ひたるなり

黒主はそつとてるく坊主をし (寶曆代)

當代の歌仙とまで稱へられたる黒主も芝居などにては關兵衛實は天
下を窺ふ大伴の黒主などと飛んだ悪人にされ誠に氣の毒千萬の至り
であるが畢竟双紙洗など云ふ怪しき傳説にて艷容目も覺むるばかり
の花形役者の小町を向うに敵役に廻はされたのが抑の因縁ならんが

怨に怨を重ねたる小町の雨乞に茶々を入るゝ氣にて照々坊主を拵へ
て雨の降らぬ呪をしたとなり

これやこの目なしの隣穴がなし

「これやこの行くもかへるも」と詠じたる盲者蟬丸の直く前が小町の
歌だとなり

穴なしも目なしもませる小倉山 (文化代)

類推すべし

三十一相とも知らず九十九夜 (?)

小町は尤も大切な或る所が缺けて居たと云へば三十二相全備したる
美人とは云はれまじきに夫とも知らず九十九夜通ひつめた深草少將
は氣の毒だとなり

年よれば不性一字で返歌なり (寛政代)

三十字をばかりて一字の返歌なり (文化代)

あうむよく物云はずしてぞとなほし (文政代)

小町老衰して關寺にありけるととき勅使を以て「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉たれのうちやゆかしき」の御製を賜はりたれば小町取敢へず「や」の一字を「ぞ」の字に換へて其儘に返し奉りしとは鸚鵡返しの歌とて世に名高き話なるが三句共に異調同型なり

虱など卒塔婆の上につぶしてゐ (明和代)

花の色香も褪めはてゝ見るも穢ムサクるしき乞食婆々となりはてたる小町の末路を云ひたるなり

すゝきで招いてはもはやほれてなし (安永代)

小町の死所異説多くして明かならざるも零落オチブレて處々を徬徨サマヨヒあるき終に野末の露と消え果てその鬪體ムクタイの目より生ひ出でたる薄が冷かに吹

き拂ふ秋風に揺られてあなめくくと異なる音を發したとあるが、さうなつては少將は借置き一人の惚手ウツテもなからんとなり

はなならばくさめくといふところ (?)

鼻ならば嚏クサメくと云ふところならんとなり

さめはてゝ見るかげもき花の色 (?)

「花の色はうつりにけりなの」歌を以て小町を代表したる句なり

ことわりを雨乞共に百度いひ (文化代)

少將に九十九度斷りを云ひ雨乞にて又一度斷りを云うたとなるが神泉苑に於ける小町雨乞の歌は俗説に従へば「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとては又あめかしたとは」なりとあれば此句ある所以なり

雨に名を残して花の色はさめ (?)

さりとは又といふときかきくもり (明和代)

上の句でくもり下の句でぶんまける (明和代)

さりとは又とよみてのない名歌 (文化代)

何れも類推するに難からず

雨乞も女はたんと口をき (明和代)

寶井其角三圍稻荷にて詠じたる雨乞の句は「夕立や田をみめぐりの神ならば」の十七字なるに小町は女だけ口數多く三十一文字を用ゐたとなり

三圍の雨は小町を十四ひき (寶曆代)

類推

十徳と十二ひとへでいゝしめり (文化代)

十徳にて其角宗匠を十二單にて官女小町を表はして二つの雨乞をか

く詠みたるなり

夕立は十七屋から京へ知れ (天明代)

毎月三度づゝ江戸京都の間を往復して文書などの交通をなすものを三度飛脚と稱し室町二丁目十七屋孫兵衛は其本名の問屋なりしとありされば江戸にて其角の句に感應ありて大夕立が降つたといふことが三度便にて京都の町に響き渡つたとなるが態と十七屋と云つて暗に十七文字を臭はした所に此句の生命はあるなり

四十八文字で京都も江戸も降り (寛政代)

類推

百姓の傘さしてよむむづかしさ (?)

大早の雲霓に草木と共に蘇りたる權兵衛田五作の連中大喜にて雨祝をなし傘をさしながら其角の詠んだる發句をながめて居るさまをい

ひたるなり

雨蛙すぐに其角が脇をつけ (明和代)

其角が詠んだ夕立やの發句に對して直に雨蛙が脇句を付けてギヤツ／＼と鳴き出したとなり

三圍の雨は豊の折句なり (明和代)

成程さう云へば夕立の句はゆたかの三字を折りたる姿になり居るなり

弟子は夏師匠は冬の向島 (?)

雨乞其角の先生は「いざさらば雪見にころぶところまで」の句にて有名なる芭蕉翁なれば師弟共に向島にて夏季冬季の名吟があるとな

り 轉ばずば翁の雪見はてがなし (文政代)

膝や手をはたいて翁一句よみ (寛政代)

二句共に前項雪見の句より胚胎せるものなり

變りもの鳶の中から出る芭蕉 (寛政代)

松尾桃青即ち芭蕉翁は忠左衛門と稱しもと伊賀の藤堂公に仕へたる武士にて後仕を致して遁世脱俗俳諧中興の祖と仰がれたる文士なる事世人の知る所なりされば芭蕉が鳶蔓の中より生えたと云つてその出身地を暗示したる句なり鳶は藤堂家の定紋なり次に一句を付して参考に供す

鳶をひきぬいて櫻を植うるなり (安永代)

上野東叡山はもと藤堂和泉守の屋敷ありしところにて其頃藤堂氏の城地は伊賀の上野に在つて其三方より上りて小高き地勢をなせる模様

の互に相似たるより忍ヶ岡を又上野と呼べり云々とは江戸砂子の

記する所なりされば藤堂邸が染井に移された後にて櫻を植付け彼の
駘蕩爛漫たる花の東臺は産れ出てたるものと知らる

芭蕉翁ぼちやんといふと立どまり (天明代)

「古池や蛙飛込む水の音」

翁は飛込み道風は飛上り (?)

蛙を隠して一方は古池に飛込み一方は垂柳の枝に飛上つたと云ひた
るなり

十七八で名高いは雨と花 (寛政代)

十七の雨は前項多く擧げたり十八の花は安原貞室の「これはく」と
ばかり花の吉野山」なり

吉野山十七文字ではめたらす (明和代)

類推

吉野丸これはくとしやれてゐる (明和代)

前句より胚胎したる遊山船の句にて吉野丸は隅田川筋を上下して遊
興の客を乗せたる當時有名なる屋形船なり

川一は吉野へ對し慮外の名 (?)

吉野丸に頡頏して壯觀美麗を矜りしは川一丸と稱する屋形船にして
此二艘負けず劣らず粹人通客を引込み絃歌の波を漂はしたることは
兩國橋川開きの錦繪などにて知らるゝ通なりされば川一番とはちと
一方を踏付けにしたる名なりとなり

貞室も喜六も一字足してよみ (文政代)

貞室は前項の通りなるが佐川田喜六の吉野の花も同じく字餘なり
「吉野山花さく頃は朝なく心にかかるみねのしらくも」

まだ東山かと庵の戸をたゞき (?)

服部嵐雪の「布圍着て寝たる姿や東山」より出で、まだ寝て居るのかと俳友の戸を敲きたるさまをいひたるなり

茶挽の哀れ蔭見世の東山 (?)

京町で居續客の東山 (?)

共に寝姿を東山にて利かせたるのみにて乙の句は吉原京町を京都に^{モテ}續りたるなり

名高い句京都の布圍加賀の蚊や (?)

加賀の蚊屋は云ふ迄もなく千代の「起きて見つ寝て見つ蚊屋の廣さかな」の句をいへるなり

蚊屋の廣さは五七五の仕立榮え (?)

蚊屋の寸法にかけて十七文字の五七五調をいひたるなり

井戸端と釣瓶で雅女の二幅對 (?)

例の千代女の「朝顔につるべとられて貰ひ水」と其角門下の才媛秋色女史が十三歳のときに上野觀音堂の井邊の櫻を詠じて「井戸端のさくら危ぶなし酒の酔」とを對稱したるなり

雪の日に文臺へのる樽拾ひ (滑稽)

「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」を柳化したる句なり

折々は發句の意味も徂徠さゝ (文政代)

其角の「梅か香や隣は萩生惣右衛門」の句を柳化して物徂徠先生も隣同士の事として時々俳句の談も聞かされたらんとするが徂徠は萱場町其角の隣に住したればなり

木曾殿と翁のやうなけちな晩 (文化代)

女郎に振られたる様なり近江義仲寺木曾殿の墓の後に芭蕉翁の碑ありて「木曾殿と脊中合はせの寒さかな」の一句を刻みあればなり

木曾の碑の裏にこゝえた翁草 (文化代)

うしろから朝日のもれる松尾の碑 (文化代)

同想異曲類推すべし

夕立や雷様は筋むかう (文政代)

夕立に雷を配して三圍稻荷の筋向に淺草の雷門が見えると云ひたるなり

夕立と雪見の間に秋葉道 (文化代)

三圍と牛の御前のほとりにある芭蕉の「いざゝらば」の古蹟との間に秋葉神社に詣る道があると俳道の夏季と冬季との間に秋を挟んでかくは詠みたるなり

狐から上り天狗で日をくらし (安永代)

狐にて三圍稻荷を、天狗にて秋葉山を利かせたる句なるが秋葉は墨

田川遊山の客など上陸して遊興せしところなること次の

三圍を溜小便のあげばにし (寶曆代)

秋葉から舟に三味線とりにより (明和代)

などの句によりて明かなるべし

川の瀬をわけて太郎と太郎様 (文化代)

牛の御前の畔に葛西太樓乃ち植文と云ふ鯉料理の名物ありさればその向岸にある太郎稻荷様と川を隔て、二つの太郎があると云ひたるなり

こひとこひ中を隔てる隅田川 (文政代)

いざさらば鯉から鯉へ舟わたし (文化代)

此二句は鯉と戀とを秀句に詠みて植文と今戸鯉濃汁の名物大七とを對稱したるなりいざゝらばの語は前項多くこれを云へり

隅田川つれが悪いとかどはかし (天明代)

隅田川の花見もよいが連次第にては歸りに吉原の夜櫻見物と來るから油斷のならぬ所だとなるが勾引カドハカスの語は貞元の頃京都の人吉田少將惟貞(江戸砂子による)の一子梅若丸舊臣の奥州にあるを尋ねて下向の途中信夫の總太と云ふ人買に勾引かされたとある昔談より出てたること勿論なり

隅田川我思ふ子はむかうなり (明和代)

「向なり」は一書「迷ふなり」とあり孰れにしても我尋ねさがす息子は向側ガハの吉原に浮かれ込んで居るとなり意味は梅若悪者の手を免れて木母寺の畔に來りて「尋ね來てとは、答へよ都鳥すみだ川原の露と消えぬと」の一首を殘し自殺して果てたる後に母なる人後を追ひ來りて狂せんばかりに慨き悲みたりとあるにとり詞は業平の「名に

しおは、いさこととはん都鳥我思ふ人はありやなしやと」にとれるなるべし

憐なる柳猿澤隅田川 (文化代)

西と東との悲しき縁故ある柳を對照したる丈の句にて猿澤の柳は奈良朝の頃采女と稱するもの讒によりて寵幸を失ひ浮世ハカテを無果みて猿澤池に入水し今に其池畔に衣掛柳とて世にも憐なる形見あること人の知るところなり

あまい酔で梅若を又母はくひ (天明代)

木母寺に梅若塚ありて毎年三月十五日は其忌日にあたり四民群參すといふさればどら息子共が梅若を煮出しに甘い母を胡麻化し吉原行きをなすとなり

年寄は皆白鬚でまくつもあり (天明代)

年寄と白鬚とを配合したる句作にてその意は云ふまでもなく邪魔になる老人株は白鬚社あたりに撒き棄て、北國征伐に向ふとなり

あくる日はいざこざ聞かん都鳥 (寛政代)

氣はありやなしやとそびく隅田川 (拾遺)

二句共に向島花見より物言ふ花見に逸れ出さんとする一件なるが語句の出所は前項業平の歌にあること云ふまでもなし

隅田川所の人は鷗なり (寶曆代)

「あれ鳥が鳴く鳥の名に都といふ字があるぞへ」とは例の夕暮の唄にて誰も知るが如く都鳥と云へば江都名物の一つに數へらるゝがこれは業平などの歌に因みてかかる風雅たる名を付けたるにて實は只の鷗に過ぎず、結局隅田川の鷗を都鳥と云ふに歸す

鳥の名を二つに分くる渡守 (寛政代)

此渡し場は上の渡しとも下の渡しとも孰れにも取らるゝ句なり参考のため狭みおくのみ

まつさきでさればぐらゐは化かされる (寶曆代)

小唄「紀伊の國」にて日本國中の隅々にまで唄はるゝ真崎稻荷は隅田川の右岸にありて田圃傳ひに吉原の近邊なりされば茲にて起りたる北國進撃の動議に對してさればなどと首を燃る位の薄志弱行の徒は屹度御稻荷様に抓まれて行く氣になるとなり

真崎の稻荷お先につかはれる (天明代)

まつさきの稻荷に女房化かされる (天明代)

此二句を以て推せば真崎も亦大分吉原行の煮出に使はれたものと思はる

たのもしい奴猪牙舟へかぢりつき (安永代)

細長い舳先の尖りたる小舟にて其形の似たるより猪牙舟とも又長吉ともいふ押送舟の船頭が造りたる舟を模型として作りはじめたるため長吉舟とも云ふと或る洒落本の序文にて見たり其頃吉原通ひなどの遊客この舟に乗つて往來したるものにて舟足頗る早く動搖甚しきものなれば慣れぬ者には随分難儀なものと見えたりされば猪牙の縁シツカリツガミに確乎トゲ掴付いて目を閉して居るやうな野暮は末頼もしい男だとなり

江戸っ子の生れそこなひ猪牙に酔ひ (文化代)

全く同想異調なり

ちよきで小便千兩もすてた奴 (?)

ひらり乗る猪牙はもとでの入つた奴 (明和代)

此奴は全く前項と反對の末頼もしかからぬ奴にて梅曆卷の四藝者米八へ通客藤兵衛が云つた文句に「棚卸でたしなませられるやうな藤さ

んなら小べりへ手を掛けて小舟へ乗移りやしねへぞ」とあるは直に以て此句の説明に代ふことを得んか

銀煙管にて下知をして堀へつけ (天明代)

柳橋あたりの船宿を乗出して首尾の松、松浦の椎の下を漕ぎ抜け御團の下あたりから舳先を山谷堀へ向け北國征伐と出掛け給ふ御大將の得意思ふべしだが明和安永代には銀煙管を持つのはその頃でのハイカラ息子仲間の大流行であつたと見えて類句頗る多きを見る、さりとしては今日の金銀は儲置き寶石珠玉をべたに光らせても猶飽き足らぬ繕紳連の贅澤に比すれば昔時質樸の風大に景慕すべきの感あり

銀煙管銀のやうだと親仁いひ (明和代)

銀を捕まへて丁度銀のやうだと云ふ親仁の迂濶さは頗る御目出度いとなり

勘當に持つてうせうと銀煙管 (明和代)

銚子への路銀に拂ふ銀ぎせる (明和代)

梅見舟卷の七に「親仁の前を失損つて些の間銚子の方へまごつきまはつて云々」などある如く當時下總の銚子は銅鑼息子追放の配所であつたと見えて類句甚だ多きを見る

罪あつて息子銚子の月を見る (明和代)

羽二重はいやと銚子の質屋いひ (明和代)

當分は鹿島まゐりと母はいひ (安永代)

など孰れも配所にある若旦那なり

銚子からさすらひの身としやれたふみ (明和代)

窮命中の若旦那が今は寄邊なき流離の身の上察してくれよと馴染の女の許へ文をよこしたとなるがさすらひを杯を献すに掛けて銚子に

利かせた細工なり

里遊とはおのしかと母文を出し (寛政代)

當時苟も粹人通客と呼ぶるゝもの俳諧の一つも燃線らねば幅が利かず今日の運座ではどうであつたなど、馴染女郎の前に見得を云ふなどよく中本などに見る所なりされば銘々に里遊だの女好だのと得手勝手な雅號を付けて獨好に自惚れて居たものなれば女郎から來た文を母が見付けて里遊さまとは御前のことかと云つたとなり

表徳を俄に土手でつけてやり (寶曆代)

前項の里遊位の所なるべし表徳とは其人の徳を表すると云ふ所より字又は俳號などのことに云ふなり、或は表具屋の徳といふ通り者ありて表徳くといひしが、いつか人の綽號のやうになりたりと云ふを聞きたれど探るに足らず京傳の仕掛文庫に『正月の初勘定から買

説ひはじめ一年中の客帳はおれが表徳で汚させ云々」などある所より見れば一種の隠し名なること明かなり

表徳を田夫野人も雨で知り (天明代)

この句より見れば其角といふは榎本順哲の表徳なりと知るべし

へえけえはやめにしやれと親父いひ (文化代)

俳諧を「へえけえ」など云ふこと例の里遊女好一派の通語なりと知るべし

月の座があいてゐんと文がくる (明和代)

俳諧の月の座を藉り來りて八月十五夜の月の座に未だ先約の申込がないうち是非く御出を待つとの文が吉原から來たとなり

三日月の頃は無心のもなかなり (明和代)

吉原にて三五明月の夜は紋日の一つにて馴染の客の懐に大影響を及

ぼす晩なりと云ふされば月に縁ある「もなか」の語をかりて三日月頃が無心の最中なりと云ひたるなり

月迄に文のくること十五度 (安永代)

朔日から當夜まで毎日一本宛の矢文とは恐入る譯なり

いものある客が月夜を仕舞ふなり (安永代)

芋と痘痕とを掛けて不男の大盡客が煽て上げられて御月見の惣仕舞をなすとなり

明月やくらい所は見世ばかり (安永代)

一人残らず惣上げの大盡遊びに見世の方は淋しいとなり

總花はすゝきの側でわたす也 (明和代)

瓶に生けたる芒にて十五夜月を言外に隠したる句なり

後月のすゝきがどうか招くやう (明和代)

これは九月十三夜即ち後の月の句にて十五夜の薄が御出く〜と招くやうにて又行きたくなつたとなり

あさつては御祥月忌と後の月 (安永代)

十三夜の月を眺めながら明後晩は歌舞の菩薩の濟度を受けた十五夜から丁度一ト月目にあたるとなり

秋の夜を二十八日息子しよひ (安永代)

中秋の明月を賞して九月の後の月を見ざるは片月見とて僻事ヒカゴトとなし特に遊里などにては忌み嫌ふと云ふ慣習ありされば月見に仕舞を付けた若旦那たるもの勢ひ來月の紋日も知らぬ顔は出來ぬといふ羽目に陥り八月十五日より九月十三日まで二十八日の間飛んだ重荷を脊負はされたとなり

ものいまひだけに月見を二度くらひ (明和代)

十五にも居ぬと十三日にも居ぬ (明和代)

類推

もちつとの事で日蓮片月見 (明和代)

日蓮上人相州龍の口の御難は文永八年九月十二日なりと云ふだけのことなり

一ト月に風月をくふいたいこと (安永代)

八月一日は古來風日カザヒとしてあれば八朔と十五夜と二度の無心は客の大痛事なりとなり

北國は八朔にもう雪がふり (?)

元祿の頃吉原江戸町一丁目巴屋の遊女高橋といふもの瘡の病に罹りて打臥し居たる所に馴染の情客來りたれば白衣の寢卷のまま揚屋入りをなしたる姿が如何にも優美であつたと云ふ所より、何時か此里

の慣例となり其當日即ち八月朔日には遊女一同白無垢の小袖を着て客に見ゆることとなりたりされば江戸の北國では八朔には眞白に雪が降るといひたるなり

富士の近所は八朔に雪がふり (文化代)

全く同想異曲なり淺草吉原の間に淺間社あるを以て富士にて雪を生かして詠みたるなり

空と親仁には知れぬ秋の雪 (拾遺)

八朔に雪の降ることは息子の外は天も親仁も知らぬとなり

秋の雪ほんたうに降る輕井澤 (天明代)

輕井澤は中仙道五十九驛中沓掛と坂本との間にある一宿にして、飯盛女郎の多く居りたる所なり、ここは信州淺間山麓にて甚だ寒き所なれば江戸の吉原とちがひ中秋になればそろ／＼本物の雪がふると

なり

月前の雪難題でおざりいす (文政代)

これも俳句の兼題などに擬へて月前の雪とは如何にも難題だとなるが成程女郎に取つては明月の紋目を目の前に八朔の小袖新調はなかなかの難關に相違なかるべしされば

桐一葉散ると鳳凰苦勞がり (文化代)

などの句ある所以なり桐一葉は初秋の季のものなれば秋に入ればとの意味に過ぎず鳳凰は太夫の異名なり

桐のない鳳凰てん／＼舞をする (文化代)

この鳳凰に桐の見立は前項とは少しく異なり金のない太夫は四苦八苦の無理算段にてんでこ舞をするとなり小判に桐の紋あればなり

鳳凰の至孝は親に桐をやり (寛政代)

類推すべし

鳳凰の羽虫を鴛母とりてすて (文化代)

喰ッ附いて離れぬ悪虫の色男を鴛母が異見して手を切らすとなり松の太夫を鳳凰と呼ぶはその尾を擴げたるが如く數本の平打を髮挿したる形容より出でしならんか或は籠の鳥など云ふより鳥王と見立てしなるべし

七月は小だとやりて氣をつける (安永代)

七月が小でお針のいそがしさ (安永代)

類推すべし

八朔の雪は質屋へ流れこみ (?)

八月の二日質屋に雪がふり (明和代)

同想異調

八朔の雪ものさしでつもるなり (寛政代)

女郎衆はさぞと大汗かいて縫ひ (安永代)

二句共に白無垢の縫ひ裁ちをいへるなり

針妙にお針といつておこられる (安永代)

當時の慣習として良家に傭はれて縫針のことをなす女を針妙といひ娼家に傭るゝものを於針といひたるより此句あるなり

こゝいらへ店を出さうとお針いひ (安永代)

さあ店を仕舞やせうと針をさし (明和代)

店を出す店を仕舞ふなど遊女屋の商賣に因んだる語を用ゐて於針を詠みたるなり

おぼえんしたとお針のをひつたくり (明和代)

五六寸お針の留守にさいはじけ (明和代)

分別が出たかお針の邪魔になり (安永代)

三句共にお針の仕事場に於ける女郎を詠みたる句にて覺えたと云つては引つたくつて縫つて見たり一寸居らぬ間には五六寸縫つて見たりいろく仕事邪魔をするには困つたものだが素人に成つた時の心掛は兎も角も感心なりとなり

狐火を一ト月とぼす賑かさ (寛政代)

享保十一年三月廿九日二十五歳を一期として夜半の嵐に散り果てたる吉原角町中疋字屋の名妓玉菊の靈を祭るとして、吉原にては七月中盆燈籠を點して景氣を添へたり數多の遊客を迷はす遊女屋の火なれば狐火と云ひたるなり

燈籠に娑婆の女の影はなし (明和代)

七月の燈籠の邊に彷徨く女といふ女は歌舞の菩薩か羅生門の鬼女か

いづれは地獄極樂に籍のある者ばかりにて地女の影は一人も見えぬとなり

燈籠の施主に息子は三分つき (文化代)

燈籠見に行きてとうく活菩薩の濟度を仰ぎ三分の布施を納めたとなるが三分は當時太夫の揚代金なり

燈籠が消えて俄に騒ぎ出し (寛政代)

燈籠は七月晦日限りにて八朔より俄の催あればかくよみたるなり

燈籠が消えて幽靈あらはれる (文政代)

表面は七日の燈籠と八朔の白無垢とを詠み裏面には十二間四方の堂に數百の燈籠を點して冥福を祈りたる平の重盛卿の薨去後に清盛の福原御殿に數千の燭體現はれたる怪異をいへる句なり

燈籠をはめて禿をうるさがり (文政代)

燈籠の人を禿はむぐつて出 (寶曆代)

燈籠を見物して居るところを馴染の花魁の禿にとつ捕ツカまつては往生
安樂再び娑婆には歸れぬとなるがこれ亦第二義は平相國の隱目附と
もいふべき稚子仕立の三百禿を利かしたるなり

禿が來ては入道へ耳こすり (天保代)

類推

咲いた櫻に駒下駄の八文字 (文政代)

なせ駒繋ぐの語を掛言葉に下駄の八文字と洒落れたる句にて三月の
夜櫻に男衆に紺蛇目の長柄傘をさしかけさせ二人禿を左右に従へ大
勢の新造引舟を引連れ三本齒の駒下駄に外八文字を履みしやなりし
やなりと道中をする花魁の姿を詠みたるなり

片足に四文は派手な歩きやう (文化代)

釣合をよく歩くのは三分なり (安永代)

同想類推

ちりんせんうちにと文を八重に出し (文化代)

下書を廊下でさせる八文字 (文化代)

籠の鳥足跡つくる八文字 (文化代)

何れも道中なるが甲は「散らない」を廓詞にて「散りんせぬ」と云つて
吉原を利かせ八重にて櫻を隠くし乙は文字に因んで稽古を下書と云
ひ丙は鳥跡と文字とを結び付けたる句作なり

八の字の筆法いまだある女房 (文化代)

女房になつて無筆のあるきやう (明和代)

甲乙互に推解すべし

根引した松高砂の氣に入らず (文政代)

松の位の太夫を受出したれど年老いたる昔堅氣の兩親の氣には合はぬとなり

あら世帯こはらしい手になりんした (明和代)

ずるふんと黽りなんしと米をかし (?)

ありんすで嫁來なんした里が知れ (文化代)

廓詞を用ゐて嫁の素性を云へる句なり

傾城ははねられる丈はねるなり (安永代)

表には跳ねまはると云つて性格の甚だ御轉婆なることを云ひ半面には、りんす、しりんせん、ざんす、など出来る丈語尾を跳ねていふとなり

十三でざんす琴柱と申しんす (?)

此の禿の語を娑婆の詞に翻譯すれば、年は十三歳でござります名は

琴柱と申しますなるが琴の糸の數を利かせたる細工なり

是は百兩と申す嫁にて候 (天明代)

謠曲羽衣に「これは伯龍と申す漁夫にて候」とあるを地口ヂグチりたる句にて天女のやうな美しい身受女房なるべし

伯龍は欄間を見るとおもひ出し (?)

三保の松原にて羽衣を落して通力を失ひたる天女を捕へて我女房とせし伯龍が一曲の舞を所望して拾ひ置きたる羽衣を返し與へたれば天女はあばよを極め込んでひらくと虚空遙に飛去つたとありされば寺の欄間などに鐫り刻みたる霓裳羽衣の天人姿を見るたびに其當時の事を思ひ出したらうとなり

足袋ぎらひもと道中もした女 (?)

當時の俗吉原の遊女は寒中と雖も素足にて足袋を用ゐざりしものな

りされば足袋ぎらひの女房はもと八文字を履んだことのある女だとなり

そもく松のめでたきは足袋をはき (文政代)

そもく松の目出度きこと萬木の緑を添へとある老松の文句を引出して御目出度く根引きされた晝三の松の太夫が始めて足袋を履いて泥足を洗うたとなり

傾城は二十八にてやつと足袋 (?)

常時の法令にて遊女稼の年齢は二十七歳限りと定められたれば此句あるなり

こんどのは二十八九のいくぢなし (文化代)

濃厚シトヤカで順良オトナシく何一つ申分のない御神さんに難癖つけて追ひ出した後釜へ据ゑた女は縫針は勿論飯もろくそつぼうに炊けぬ女だと二十八

九にて年明き女郎たることを利かせたる句なり

観音でうられ不動で年があき (文政代)

浅草と深川とを並べてその縁日十八日と二十八日とを突出しと年明との年齢にかけていひたるなり

餅花を二十九日の晝くばり (明和代)

これは目黒不動なるがその縁日に参詣して御土産の餅花を買ひ歸りに品川の女郎屋に引つ掛り翌日ぼんやりと歸宅したとなり

品川で投入にする目黒花 (明和代)

女郎屋の生花に餅花を投挿にしたと云ふ丈の事なり

ふとどきな目黒秋出て冬かへり (寛政代)

正五九の三月は最参詣者多く此句は九月二十九日に家を出て流連三日十月になつて歸つて來たとなり

榮華のうちに粟餅が堅うなり (安永代)

一夜の榮華粟餅のみやげなり (安永代)

粟餅亦目黒の名物なり品川にて面白き夢を見て居るうちに折角の御土産も堅くなつて仕舞つたとなるが榮華の語は恐くは粟と云ふ字より胚胎せしならんか次の句参照すべし

粟飯の煮え立つ頃が即位なり (文化代)

盧生といふ人粟飯を炊くうちとろくと居眠をなし天子と成つて榮耀榮華を盡した夢を見たといふ支那の古譚を柳句としたるなり

朕々といふが盧生の寢言なり (明和代)

うなされる盧生杓子でつつつかれ (明和代)

目がさめてあぢきなく喰ふ粟の飯 (寛政代)

何れも盧生が夢なり参考として添ふ

しはん坊連の餅花ことづかり (明和代)

くらはすばいゝはだまれと粟の餅 (安永代)

一は石部金吉一は野良倉吉甲は人の餅花まで持ち歸り乙は我粟餅を石にして歸る天下泰平と家内不和との好對照なり

不動様うれさうもなき御顔付 (明和代)

右手に降魔の劔を持ち左手に制縛の繩を握り制吒迦、矜羯羅の二童子を左右に控へ火焰を脊負つて嚴然と立ち給ふ御姿は中々以て犯すべからざる御威勢であるのにそれを賣つて女郎買などに行くとは怪しからぬとなり賣るとは口實を設けて人を欺くことなり

紅葉を賣り仕舞ひ唐の芋を賣り (天明代)

吉原の裏手下谷龍泉寺町に正燈寺といふ禪宗の寺ありて天保代の末頃までは楓樹境内に多く紅葉の頃には觀賞の客杖を曳くもの絶えざ

りしと云ふされば多くの遊治郎は此寺を賣つて北國通ひの賣出に使
つたことは類句によりて明かなるがさて紅葉も散つて仕舞つて何を
がな賣れさうなものはないか知ら、おつとあるはく大鷲神社の霜
月酉の市に賣る唐辛でも買つて來よういや賣つて出ようとなり

戌の町どこにあるえとふくれてゐる (?)

唐の芋を賣つて一夕の北國遊までは上出來であつたが翌日ぼんやり
熊手でも擔いで歸つて來て、へん、御惚トボけでないよ今日は戌の日だ
よと山の神の御機嫌頗る斜なりといへる句なり

酉の町不首尾な奴は屁もひらず (明和代)

芋を賣りそこねた奴は屁も放らずに内に居るとなり

小一兩鷲にとられる大不首尾 (安永代)

酉の市の歸りに吉原に引きかゝりて三分の女郎でも買つたとなるべ

し

女さかしくて紅葉賣れぬなり (天明代)

牛ではない紅葉を賣りそこねて閉門塾居とは氣の毒千萬なれども御
内儀の慧眼達識には感服の至りなり

正燈寺妻戀ふ鹿はかへるなり (安永代)

紅葉の語を隠して言はぬ所此句の生命ならんが偶にはこんな嘸孝行
の亭主もあると見えたり

高尾の亡靈紅葉見にのりうつり (安永代)

三叉にてさげ斬にされた三浦屋高尾の幽靈が正燈寺の紅葉見の客に
乗移りて迷はすとその紋所の紅葉を京都の高尾に云ひ掛けたる句也

母親がまゝで紅葉の尻をわり (文政代)

實の母親でないので息子の尻を割つて親仁に告口をしたとなるが繼

を真間に云掛けて真間の紅葉見と内を誤魔化して出で實は正燈寺其
又實は女郎の仕掛の真赤な紅葉を賞翫して化けの皮が剥げたとなり

きのふは真間へいつてのとびつこくる (安永代)

下總鴻の臺の真間は同じく紅葉の名所なるがこれは魔窟とは遠ざか
りて眞の文人墨客などの多く杖を曳きたる所にて江戸より彼是三里
の道程あれば足を痛めて跋ビツコひきく談をするといふ丈なり

玉の盃底なきが真間へ行き (寛政代)

野に暮らすやつらが真間へ二三人 (天明代)

など皆前句を説明するに足らん但し玉の盃は二三七頁兼好の句を參
照すべし

真間へ來てなんのこつだと息子いひ (安永代)

紅葉見といふから正燈寺か海晏寺かの積りにて一緒に出掛けて見れ

ば正直な紅葉見にて誑らかしさうな魔性の者も居らぬに奴さんオモハク思惑
違ひをしてなあんの事だ馬鹿々々しいと失望したとなり

紅葉狩息子無明の酒に酔ひ (明和代)

謠曲紅葉狩に維茂といふ人紅葉見に赴き悪鬼に誑らかされて酒に酔
ひ美女に狂うたとあるがその文句に「淺ましや我ながら無明の酒に
酔ひ云々」とあるより妄執迷暗醒むることなき茶屋酒に現を抜かし
たといひたるなり

紅葉狩今は遊女がたぶらかし (寛政代)

紅葉見の鬼にならねば歸られず (寶曆代)

紅葉狩どつちへ出ても魔所ばかり (明和代)

誑かし、鬼、魔所、みな出所同源にて北へ行けば正燈寺南へ向けば
海晏寺の紅葉があるとなり

海晏寺眞つ赤な嘘のつきどころ (明和代)

南品征伐の口實に海晏寺を使ふとなるが眞赤な嘘と云うて紅葉を隠したる句なり

御來迎間もなくひいんひんといふ (明和代)

佛などの此世に出現することより轉じて日月の出に我姿の雲などに映ずることを御來迎と云ふなりここにては活菩薩にもまがふべき艶やかなる遊女の姿に譬へて床の裡にて待ちに待ちたる御來迎にやれ尊とやれ難有やと隨喜渴仰の涙をこぼす暇もなくはや東明と明けかかり驛鈴の音がチャラン／＼駄馬の嘶く聲ヒイン／＼とは情なき次第であるとなり品川八ツ山は月の名所にて二十六夜待などには多數の士女群集したる所なれば夜露に打たれて寒い思をするよりは布圍着て嫦娥の御來迎を拜まんと企つる若い信者多かりしなり

品川は年増の月も見るところ (安永代)

十六夜イザヨヒの月とでも云へば兎も角はや二十六夜と云へば人にたとへて見れば餘程の年増に當る譯なれば盛の過ぎた月を見るところなるが品川は四宿の一にて既に御膝元の區域外になれば遊女の年季なども吉原の如く二十七歳迄との制限もなかりしものかと思はるされば年増の月も見ると云つて老妓の月經を利かせたる句ならんか

品川の衣桁も、ひきなどもかけ (明和代)

品川は按摩ばかりの下駄の音 (明和代)

宿場女郎屋の叙景にして馬の杳や鞋の足音のみにて足駄の音をさせるは按摩ばかりだとなりされば衣桁に股引や脚絆のかけ居るは然るべき筈なり

賣れぬ奴馬の屁ばかりかいである (?)

出女の鏡にうつる馬のつら (寶曆代)

同じく宿場女郎屋の店先を叙したる寫實句なり出女又出女房とも云ひ飯盛女のことなり

品川は馴れると盛つてくれるとこ (文化代)

ダン／＼馴染になれば飯も盛つてくれるとの悪口なり

旅日記盛らせた飯はくひかくし (文化代)

飯盛を買つたこと丈は日記に付けずに誤魔化すとなり

江の島の十里こなたへ三日居る (?)

品川に居るに蔭膳三日据ゑ (安永代)

甲乙互推すべし

あのげんき戸塚までよう行かうぞい (安永代)

戸塚だちとは見えますとぎふはいひ (明和代)

戸塚は江戸より丁度一日程の處にある宿場にて甲は旅立乙は旅歸りなり高輪あたりまで見送つてあの血氣では兎ても今夜は戸塚まで行付くことは出来まいとはハテ不思議な事なり晝過からぶら／＼御立になれば日暮時分に御宅に御着になるので丁度いい鹽梅でげせうエへへなどは品川の妓夫公もナカ／＼抜目がないとなり

川留とお抜けなんしと女郎いひ (安永代)

水のない川留江戸の出口なり (天明代)

大井川よりは品川首つたけ (?)

丙句は以て甲乙二句の解説となすべし

にくらしいきぬ／＼を見る旅送り (明和代)

まだ俗がおとなしいよと旅送り (明和代)

芝には三縁山増上寺を始めとして多くの御寺ある所なれば品川第一

の御得意客はこれ等圓頂緇衣の坊様達なりしなりされば法衣の袖に
ぶらさがつて御近い内に屹度ですよなどと門口カドで巫山戯散らすのを
見たる朝立の旅送りに來た連中がまだあれよりは法の道りに入らぬ凡
俗の方が餘つ程身持がよいと言つたとなり

品川はころもくの別れなり (安永代)

きぬぐいではなくころもくと云ふ丈の洒落なり

安房上總ほめく二三戒破る (安永代)

品川樓上より房總の景色を眺めながら邪淫、妄語、飲酒の二三戒を
破るとなり

ばうしうの雲晴れやらぬ品の月 (天明代)

房州と妄執マウシフとを言掛けたるにや

十八丁あなたへ僧は四つ手なり (安永代)

十八丁は芝大木戸より歩行新宿までの里程なるが、特更に十八丁、
僧などと謠曲鉢木にある源左衛門が「是より十八丁彼方に山本の里
とてよき泊りの候云々」と時頼入道へ云ひたる語を用ゐたる作者苦
心のある所なるべし

高輪へくると後で帯をしめ (明和代)

はやがはり牛町からは凡夫なり (安永代)

後帯・凡夫などと孰れも反對の詞を用ゐて僧徒を云へる共に同趣異
體の句なり

品川の客人べんのあるとなし (文化代)

人偏のあるは侍、なきは寺と云ふ字なりされば品川の大事な客は坊
主と武士だとなり次の句参照すべし

きついで國分を柔にする手管 (文化代)

島津家の屋敷は芝にありて勤番の若侍など多く品川に遊興したるものなりされば無骨な薩州武士を國産の強い烟草に利かせてかくいひたる句なり

品川の手取り上布をねだり出し (?)

前句と同型異工なり國産の上布にて薩摩を隠したる句なり

抹香も國分もにほふ品の月 (文化代)

品川は山の芋より薩摩芋 (明和代)

矢張り人偏のある客とない客との對照なり

傾城は飯盛客はしやくしなり (?)

杓子と釋氏との洒落に過ぎず

藥箱もたず品川さして行き (安永代)

品川は吉原などと違ひ江戸の朱引外なれば醫者に化けずとも僧形の

ままに大威張にて行けたるところと見えたり

中宿の内儀おどけて脈を見せ (明和代)

當時の醫者は多く髪を剃落として坊主天窓なりしを以て吉原に通ふ

ナマクサ

腥坊主共は法衣を脱ぎすて、黄八丈の小袖に着換へ黒の羽織に一本差と云ふ姿に化けて世間の目を暗ましたるものなりされば中宿の女將が毒庵様脈を見て頂戴なと洒落れたとなり

中宿へ出家這入ると醫者が出る (天明代)

類推

芳町へ行くにはまねをせずとよし (安永代)

當時日本橋芳町には陰間茶屋とて男娼の巢窟ありしがこれは女犯の罪にならぬ故に醫者に化けずともよしとなり

芳町へ羽織を着てははがきかず (寶曆代)

芳町の御客様は御殿者後家などの外は男にては先づ坊様に指を折らねばならぬされば俗の旦那よりは抹香臭い法衣の方が持てるとなり

よし町は文と手紙のあひを書き (明和代)

陰間は又野郎などと稱へ十四五から十八九まで位の美少年にて多く役者の下地つ子などが化粧を施し振袖を着て客に接したるものにて女とも男ともつかぬ異體の解らぬ魔性の者なりされば一筆敬上と
りくとの間の文を書くとなり

よし町のけんべきになる以呂波茶屋 (明和代)

當時谷中感應寺の境内には數戸の茶屋軒を並べその暖簾に以呂波の三字を染出したれば世呼んでいろは茶屋と稱したり此處に多くの茶汲女居りて墮落坊主を誑かしたりと云ふされば以呂波の御惚氣は芳町野郎には慥に痙癲の種なるべくおや御馳走様、貴僧、按摩賃を驕

つて頂戴なと膝小僧の邊アタリを振りあぐるとなり

留めるなよ佛がくると以呂波茶屋 (安永代)

いや、さう緩つくり遊んでは居られない、もうそろそろ葬式が来る時刻だとなり

襟卷をしごきに貫ふいろは茶屋 (明和代)

真ん丸な首の廻りに卷付けたる白縮緬の襟卷なるべし

富の札買つてとねだる以呂波茶屋 (安永代)

江戸時代には富突大に行はれ安永天明の頃感應寺、湯島天神、目黒不動の三ヶ所は最著名なるものなりしが次第に隆盛を極め天保代には七十ヶ所以上の富突場を見るに至れりとは日本風俗史の記する所なり以て推すべし

大笑富場でしやくしおつことし (天和代)

人に氣付かれぬやうに杓子を懐中して行けば富札の鬨當るとの迷信ありたれば此句あるなり

百兩を錐でつゝつく谷の中 (文政代)

谷中まで行くを湯島でつきとめる (文化代)

不動様どうぞ富をに聞きあきる (文化代)

前句類推

入髪をした入道にぬつて見せ (明和代)

入髪又附鬢などと稱し薄き髪に添毛をすることなるがここにては先づ鬢とも見るべきか、さて入髪をして化けて來た狸入道には狐の方でも眞白く塗立て、誑かすとなり

きつゝなれにし大門ではやすなり (文化代)

此はやすは生すにて即ち附鬢などをすることなり來慣れたる吉原の

門口にて化けるとなるがきつつなれににして法衣コロモを云ひ隠さんとは聊か以て無理なるかの感なきにあらざるも外に適當なる解釋を得ず見る人の判斷にまかす五三頁二人とはの句参照すべし

風吹けばどこか女房大嵐 (文化代)

在原業平河内高安の賤女シヤノメの許へ通ひけるがその妻露ほども吝氣嫉妬などはしたなき振舞なく或夜例の如く出て行く主人を機嫌よく見送り後に獨り悄然として「風吹けば沖津白波立田山夜半にや君がひとりこゆらん」と口吟みたるを行く振をして窃に立聞したる業平は痛く我妻の貞操に感じふつゝ河内通ひを止めたりとは世に傳はる美談なるが夫とこれとは大違ひにて此女房は戸障子も崩れむばかりブン／＼暴ばれ散らして風吹けば所の騒ではないとなり

風吹けば吹けと女房早く寝る (?)

大嵐から見ればふて寝の方まだ増なるべし

蚊にくははれ沖津白波畜生奴 (?)

立聞をせぬと一首はすたるところ (寛政代)

類推

御夫婦の名歌立田の山と川 (滑稽)

立田山は前項の通り立田川は「千早振る神代も聞かす立田川からく
れなるに水くゝるとは」なり

白波の歌からやんだ盗喰ひ (?)

白波と盗喰ひと縁語を結び付けたる所此句の生命なるべし

あくた川神代もきかぬふらちなり (明和代)

業平或貴女と通じ互に手に手を鳥が啼く東を指して道行と洒落込み
芥川にてその女を脊負うて涉りたりとの俗説あるより神代も聞かぬ

と前項の歌の中七文字を利かせたるなり

あれさ抓らせ給ひそと芥川 (滑稽)

負はれながらあれさ抓つちやいやだよと地下ならば云ふ所を抓らせ
給ひそと上臈ミヤヒの雅なる語を使つて笑はせるところ此句の味のある所
なるべし

芥川鍋取めがと追つかける (明和代)

宮中武官のことを鍋取公家と云ふはその冠の兩側に附せる綏オイカケの形が
鍋取に似たるを以てなり當時の鍋取は今日のと違ひ扇形なりしと云
ふ同じく業平の駈落をいへる句なり

業平を追ふのに水も逃げるなり (文化代)

業平卿は頗る附きの風流才子にて到る處に艶聞の種を蒔きたるなる
がこれも同じく昔男の色沙汰なり或る人の娘と通じ手を引いて武藏

野を逃げ行くところを大勢の追手に迫られ草叢の裡に姿を隠したれば尋ね倦ぐみたる追手共火を掛けて野を焼拂はんとしたりそこで娘は飛出して「武藏野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」の一首を詠じたとは世に傳はれる昔譚なるが水も逃げに武藏野を隠して云ひたるなり次の句参照すべし

逆水をおつつまかつつ家を建て (安永代)

茫々として際限もなき武藏野の原野を切り開き／＼て家を建て草より出て、草に入ると詠せられた月も薨より出て、薨に入ると歌はるる方四里の大江戸の町が出来たとなるが逆水のこととは江戸砂子中の一節を抜きて説明に代ふべし「あつま路にありといふなる逆水のにけかくれても世を過すかな」俊頼朝臣、これは眞の水にあらず武藏野の漕賃の草も若く生立ちて長閑なる春の空に地氣のたちし此方よ

り見れば草の葉末をしよろ／＼と水の流るゝが如く見ゆるなり其所に到り見ればなくて又向の方にその流るゝごとく影見えて水の逃ぐるに似たり三月前後より四五月頃までありて秋冬はなし云々

逆水も白水になる 繁昌さ (寛政代)

同趣異工、白水は米の磨汁なり

武藏野は榎を四本ひつこぬき (文化代)

幕府の制度にて街道筋に一里毎に塚を築きその上に榎を植ゑたりされば江戸は四里四方と云へば一里塚を四つ程潰ぶしたと云ふ丈のことなり

はきだめの廻りが凡十六里 (文化代)

これも江戸の四里四方を云へる句なるが江戸は諸國の人々の寄り集るところなるを以て掃溜と云ふ諺あるなり

掃溜のちりを沾涼かきあつめ (?)

此書にも毎度引出さるゝ菊岡沾涼の江戸砂子と云ふ江戸の地理に關する書物を書き著はしたることをいへる句なり

兄は腰蓑弟は緋の袴 (寛政代)

緋の袴を着たる宮女と駈落などして艶名を一人で脊負つて芥川にお半長右衛門を時代に演つた業平の兄中納言行平卿は須磨浦の配所に村雨松風の腰蓑などを抓つて戯れたとなり

腰蓑の上からつめる中納言 (寶曆代)

類推

行平は五風十雨にやせがつき (寶曆代)

五日目と十日目須磨で御寵愛 (安永代)

同想異曲村雨松風の二女を五風十雨に利かせて云へるなり

浪の花ふきぶりで汲むおもしろさ (明和代)

白沙青松風光明媚の須磨の海濱にいづれ劣らぬ月花の二美人が藁束の振下げ髪に振袖の袂を絞り腰蓑を着けて衣冠美々しき貴公子の傍に浪の花を汲んで居る一幅の土佐繪そのままを柳化したる句にして吹きにて風を、降りにて雨を巧に隠していひたるなり

取膳の時も業平筒井筒 (?)

業平幼少の頃隣家の少女と常に井戸の邊にて仲よく遊び戯れて居たりしが漸く長じて物の哀れを知り初めしとき「筒井筒あつゝにかけしまろかたけおひにけらしな妹見さるまに」の一首を書き送りたれば女の方よりも「くらへこし振分髪も肩すきぬ君ならすして誰かあくへき」と返し終に妹脊の語らひをなしたとは好箇の情話として世に傳へらるる所なれば歌の文句を藉り來り膳を井筒に見立て、琴瑟

和合のさまを詠みたるなり

有常もあぶなく思ふ遊び場所 (文化代)

此危くは井戸に陥ると遠くて近き男女の間との二様に掛けて云ひたるものにて紀の有常は業平の侍者なり

長うたも字あまりもある古今集 (文政代)

當時江戸に長唄、字餘りなどいふ俗謡盛に行はれたるものなれば古今集の中にも長歌もあれば六音八音などの調に詠まれたる字餘もあると云つた丈のことなり

字あまりも意氣深川のせんどうか (?)

深川繁昌の頃には字餘潮來などと云つて都々一様の唄専ら流行し船頭などが美聲を張上げて唄ふのは中々意氣なものであつたと古老の談に聞けるが下の句より上の句に讀みつつけて意味相通する旋頭歌

といふ歌の一體を語呂相似の船頭歌と秀句に詠みたるなり

きゝ酒のきげん櫓へこけるなり (安永代)

此句表面の義は酒の試飲をし過ぎてよろゝと火燧櫓にころげかかるとなるが裏面の意は新川の酒屋の番頭が一杯機嫌にて深川櫓下にしけ込んで内緒遊びをするとなり

深川へ行つてくるほど長湯なり (安永代)

同じく番頭が風呂に行くこと云つて主家を出て内々そつと永代橋を渡りて深川に赴きちよんの間遊をなすとなるが深川へ行つて居るのに深川へ行く程かかると云つた所に狂味あるなり

新川の菰つかぶりは藏すまひ (文化代)

新川新堀の酒屋には藏一杯菰被の酒樽が積んであるとなるが橋の下にでも住むべき乞食が立派な藏に住むと狂じたるまでなり

鼈甲の天秤棒をかるこさし (文政代)

輕子とは擔き人夫のことなるが深川にては遊女の異名として用ゐられたりされば天秤棒ほどの鼈甲の笄を差して居ると狂じたるまでの句なり

四六から鞍替二十四文なり (文化代)

當時四六店と呼ぶ晝六百文夜四百文の下等女郎屋ありその女郎が一層墮落してたうとう二十四文の切賣とまで成下つたと九々の聲を利かせて云ひたる句なるが京傳の女房氣質中にも「まだ棄てぬは戀の道二十四文で切賣々々」などある如く二十四文は當時夜鷹などの枕價なりしなり

霜天にいたゞき二十四文とり (文政代)

霜天に戴きとは霜夜の露天に糸立一枚の御座敷にて娼法をなすと云

ふことと既に年を喰つて双鬢には白髪が生えて居ると云ふことの兩様にかけて夜鷹の憐はかなき境界を云ひたるなり

振袖で天命を知る 吉田町 (明和代)

本所から出る振袖は賀を祝ひ (天明代)

本所吉田町は夜鷹の巢窟なるが此二句は共に振袖などを着て若い風を装うて居るも實は五十以上の婆あさんもあるとなり

唐崎と石山つらき 吉田町 (文政代)

夜の雨と月の夜とには娼賣が出来ぬでこまるとなり

雨と火が一時にふる 吉田町 (文化代)

これ亦同想の句にて雨が降つた晩は火が降るやうに忽ち困窮に責められるとなり

提重^{リゲデユウ}は胡粉下地のやうに塗り (文政代)

提重は淫賣の異名、漆器の下地を胡粉にて塗るにかけて詠みたる句なり

九十夕も二十四文も同じ夢 (拾遺)

九十夕即ち一兩二分の高價を拂つて錦欄緞子の三つ布團に鳳凰を擁するも糸立の蓆一枚に鷹を抱いて眠るも春の夢にはかはりはないとなり

蕎麥腹でふくれかへつた床をとり (寛政代)

鼻毛の長さうな大盡客に強請^{ネダツ}て三つ布團を積みその數初には其家のもの全體に蕎麥の總振舞をなす慣例ありたれば仲居などが御馳走の膨れ腹にて身體^{カラダ}の埋まりさうなふはくした寢床を敷くとなり

夜具ふとん吉原中の蕎麥をくひ (寶曆代)

しきぞめの蕎麥はよつぼどのびたもの (文化代)

類推

内のふとんが二三十出来るなり (安永代)

それ丈金を費せば内の蒲團が山程積めるとは至極御尤なる妻君の愚痴なり

流行におくれた羽織皺になり (文政代)

氣の利かぬ藝者は一生涯^{ウヤツ}茹立が上らず、まごくして居るうちに額に縮緬の皺波が打寄せ來つて見返る人もなき姥櫻となり果つるとなり當時深川藝者の異名を羽織と呼びたること爲永物など繙きたる粹士は夙^{トク}に御承知の筈なり

羽織を二枚あつたかい雪見舟 (文政代)

羽織の辨天江の島を唄つてる (文政代)

類推すべし江の島は「相模名所はさまざまに」と唄ひ出す歌澤能六

齋の作りたる本調子ものなりと

打掛へ羽織がついて六十匁 (?)

打掛を着た太夫一晚の揚代は藝者附にて一兩かかるとなり

八百がもとで賣るのが三分なり (文化代)

三分は當時松の太夫の揚代金なりされば嘘八百といふ俚諺を利かせて惚れたはれたの嘘を三分で賣るとなり

晝三を買掛つたが因果なり (明和代)

始めから太夫などを買掛つたのが因果で二進も三進もいけなくなつたとなるが太夫は晝三分夜三分の揚代金なるを以て略して晝三と云ふなり

夜具の損料を淺黄は三分出し (安永代)

淺黄裏はすべて勤番者などの國侍の異名にて略して淺黄とも云ふな

り多くは紫痴なる無骨者にて先づ以て粹の世界の吉原などには不向の側と知るべしされば晝三の太夫を買つても宵にちらりと見たばかりにて一晚床の番をなし三分といふ高價なる夜具代を拂つて歸るとなり

ヤイ喜助骨の湯漬が喰はれるか (天保代)

羽織より女藝者と淺黄いひ (文化代)

板前の手際を見せた潮を出せばこんな骨の湯漬が喰へるかと怒鳴り且那羽織を一枚上げませうかと云へば幫間と間違へていやそんなものは入らぬ女藝者を呼べと云ふなど成程これでは持てぬのも尤なり

門がやかましいで一分二朱が買ひ (安永代)

屋敷の門は暮六つを以て鎖す成規なれば淺黄連は一分二朱だけ女郎を買うて歸るとなり一分二朱即ち三分の半額は晝遊び片仕舞の揚代

金なり

人は武士正九ツに女郎を買ひ (天明代)

侍は坐るとすぐに時をきゝ (寶曆代)

六ツぎりの門で駕かき一人まし (安永代)

三句同想類推すべし

ひぐらしは憎うざんすと淺黄もて (天保代)

通常フタリマヘの後朝なら鴉が憎うざんすと來る所なれども晝遊の別れには蝸が憎まるゝとなるが淺黄先生も偶にはこんな嬉しがらせを聞かされることもありと見えたり

直の高い奴には屋根をふいておき (安永代)

吉原細見に晝三の太夫の名の上に山形に星の印を附したる故山形を屋根に見立てたる句なり

掛直なし一山三分づゝにうり (安永代)

星を買ふ息子は親の光なり (文政代)

山の字星の字の出所前句推解すべし

四角は城持山形は座敷持 (?)

武鑑と細見となるが武鑑に城持大名は四角の黒地に城の白字をあらはしてあればなり

表紙をはねると松葉屋半左衛門 (安永代)

松葉屋半左衛門は江戸町一丁目の角玉屋の向にありたる遊女屋なれば大門を這入ると直掛チヨツカ、リの家にて其時代の吉原細見の筆頭第一に記されたりされば細見の表紙と大門の扉とを二様にかけてかく詠みたるなり

直は三分のろしを見たら笑ひさう (文政代)

三分の太夫はすばらしき權式を有し乙に濟ましこんで初會の客などには滅多に笑顔も見せぬといふ有様なれば幽王の褒姒に擬へて狼煙でも見ねば笑ふまいとなり

幽王はこそぐることに氣がつかず (安永代)

事なきに狼煙を揚げて諸侯の軍兵を呼び集め褒姒の笑ふを見て喜んだとは誰も知る話なるがそんな手數のかかることをせぬでも腋の下に手を入れて擦ぐつた方が早道であらうにと狂じたる句なり

吳の國を眉をひそめて傾ける (安永代)

絶世の美人が物思はしげに襟に頸を埋め胸に手を當て、少しく眉根に小皺を寄せた所は雨に惱める海棠のそれにも増して艷容嬌態丈夫の鐵腸を蕩かすに足るものありされば吳王の夫差は西施の鬢に涎を垂らしてたうとう越王勾踐の爲に滅されたとなり

蛇皮線をひくが伍子胥の氣に入らず (安永代)

吳王夫差は其臣伍子胥の諫を用ゐず越王より贈りたる美人西施の色に迷うて和を許し淫樂に耽つて居る間に越王は臥薪嘗膽竊に兵力を練り終に吳王を打滅ぼして會稽の耻辱を雪ぎたりとは歴史の説くところなり日本なら意氣な爪弾かなんかで殿様を骨抜にする所なれどそこは支那美人のこと故蛇皮線などを搔き鳴らして夫差を垂らし込んで居る西施を見て伍子胥は苦々しき事と憤慨したとなり

國政も見る目がなくて吳がつふれ (?)

そりや見たかとは東門でいひはじめ (拾遺)

後伍子胥は太宰誣といふものゝ爲に讒せられ終に自殺を遂げたるがその末期に越の爲に滅ぼさるゝ吳王の末路が見たいからおれの目の玉を抉り抜いて東門に懸けて置けと遺言して果てたとあり果して吳

王滅亡したれば伍子胥を見る明がないと國政補佐の伍子胥の目がないと兩方にかけていひたるなり

勝迹の元祖は五湖に遊ぶなり (文化代)

陶朱公見切つて錢をつなぐなり (?)

勾踐を助けて吳王を討滅ぼした范蠡は後越王と安樂を共にすべからざるを悟つて舟に乗じて五湖に浮び海に出て齊の國に入り一旦齊王の宰相となりたるも久しく盛名の下に居るは不祥なりとかなんとか六つかしいことを云つて顯職を退き自ら陶朱公と號して算盤珠を彈き終には巨萬の財を蓄へ猗頓と共に其富を並べ稱せられたとは人の知るところなり此二句只范蠡の生涯を柳化したる丈のことなり

和は見まい漢は見ようと目をえぐり (?)

我主人の亡ぶるのを見たいとて目の玉を抉つたのは伍子胥なるが我

主人の仇の榮ゆるのを見まいとて自ら盲目となつたのは惡七兵衛景清なりとて和漢忠義の仕方に雲泥の相違あるを詠みたるなり

すさまじく吳をとりさばく越の見世 (安永代)

駿河町の吳服店越後屋を吳越の語呂に引つ掛けた丈の句なり

吳服店我名の下にかしこまり (寶曆代)

手代まで正札附の吳服店 (文化代)

此二句當時の風俗を追想するに足る好史料なるが大丸などの如き大いなる吳服店にはずらりと列んで客に應對する番頭の坐つて居る上に善七とか久助とかその名を紙に書いて張出されたるなり

吳服屋もよくはやるのは二人つけ (明和代)

番頭は坐つた儘にて、注文の品物を出し入れする役前は小僧の仕事なりさればよく客の附く番頭には二人の丁稚を附け置くとなるが吳

服屋もの「も」の字は吉原にてよく流行る花魁には禿二人を附しあ
るを以てなり

鞍替のあはれは禿對になき (寶曆代)

稻びかり禿二人をぶつちがへ (?)

など皆二人禿の説明句となすに足るべし

吳服屋の愛想になるものがふり (天明代)

當時吳服屋には屋號を染出したる多くの番傘を備へ置きて俄雨など
の節に客に貸したるものなりされば愛想になるものとは雨のことを
指せるなり

五百ほど手附を置いて傘を買ひ (安永代)

途中俄雨に困つて吳服屋に飛込み反物はどうでもよいが只五百の手
附を置いて傘一本借りではない買つて歸るとなり

吳服屋の傘かへすものにせず (安永代)

吳服屋をさゝずに出るは雨宿り (明和代)

類推

傘をかす家の稻荷で雨がふり (寛政代)

其角の雨乞(九八頁)と越後屋の貸傘とを結び付けたる句なるが三圍
稻荷は當時三井の抱地なりしを以て此句あるなり

三圍で下にはおかぬ越後者 (文化代)

参照すべし

越後屋の寺に秀郷鐘をあげ (天明代)

三つ井を三井寺に引つ掛けた丈のことなり秀郷の鐘二三句参照とし
て附す

浦島は無事かと藤太尋ねられ (拾遺)

江州瀬田の橋にて三上山を七卷半したといふ大蜈蚣を射殺して龍女を助けたる田原藤太秀郷はその返禮とあつて龍の都に伴はれ乙媛の寵遇を受けたとは名高き御伽噺なれば其昔嘗て龍宮に行きて玉手匣を貰つて歸つた丹後の國の漁夫浦島太郎は今に達者で居るかと尋ねられたとなり

海坊主持にしようと藤太いひ (滑稽)

藤太龍宮を辭して歸る時に大梵鐘を始めとして種々の珍寶珠玉の土産を貰ひ鯛や比目魚や其他いろ／＼の眷族に送られて來る途中荷物を海坊主持にしようではないかと言つたとなり多人數連立ちて荷物などを持行くとき坊主に行遇ふ毎に荷物を次の人に渡し合うて運ぶことを坊主持と云ふ故海坊主にて海底を利かせ且つ梵鐘にも多少の意味を掛けたる句作なり偕て海坊主とは人を水中に引込むと信せら

る、怪物の名なりと云ふ

越後屋が見えさうなものと富士でいひ (文政代)

越後屋のある所より富士の雄姿を雲煙模糊の裡に拜むことが出来る故富士の頂上からも越後屋が見えねばならぬ理窟だと謂つたとなるが味うて見れば諷刺とも將た教訓とも取れば取れる句なり

吳服物釣をしながら賣るもあり (寛政代)

實に名畫戎で招く吳服店 (文化代)

尾張町二丁目の角に戎屋といふ吳服店ありてその軒暖簾に鯛を抱へたる惠比須の招牌を出したるより此句あるなり

十月の隣へ布袋店を出し (安永代)

戎屋の隣に布袋屋と云ふ吳服店あり十月二十日は夷祭なれば一面に戎屋を隠し一面に布袋の便々たる腹に對して臨月を利かせてかく詠

みたるなり

神無月一人残つて笑つてゐる (文化代)

正直のかうべ十月輕うなり (文化代)

十月は神無月とて八百萬の神々達出雲に神集カントドヒに集ひ給うて縁結を行ひ給ふとあるに戎様丈は御留守番にて一人舞臺の嬌ニョ乎々々もので鯛の御馳走でも召上るとなるが乙の句は正直の頭に神宿るといふ俚諺をひきて神様の御留守中は天窓が輕からうと詠みたるなり

吳服屋も二人り乗つてゐる寶舟 (天明代)

七福神中に戎と布袋とあるといふ丈なり

越手代西施に夜具をねだられる (安永代)

前項范蠡が五湖に舟出の際には吳王の寵姫西施を連れて逃げたとの傳説ありされば范蠡は越王補佐の重臣なれば越手代と云つて越後屋

の大伴頭に見立て吉原の西施に積夜具(一六〇頁)の無心を受くると詠みたるなり

お多福に書かれた顔のうつくしさ (?)

大津繪のやうに王昭君を書き (安永代)

漢の元帝三千の侍妾中より一人を選んで匈奴の單于と云ふ者に賜ふ時に毛延壽といふ畫師に命じて凡ての宮妃の肖像を描かしめその中にて容色最劣りたるを送らんと趣向なりと聞きたる宮妃の連中は毛延壽に内々袖の下を通じて成るべく美貌に寫さんことを頼みたるに王昭君のみはおのれの容色に安んじて賄賂を贈らざりし爲延壽は浮世又平の書出したる大津繪の滑稽畫ボシナ見たやうな御多福に描いて差出したれば情なや王昭君は終にその人身御供に擧げられて匈奴の手に渡されたとなり

三千の似づらを書くも金次第 (文化代)

類推

ひどい見忘れ桑摘をくどいてる (文化代)

魯の國の秋胡といふ人、妻を娶りたる翌日より官命によりて他國に赴き五年振に歸國の途中一人の美女桑の葉を摘み居たるを見て野心を起し戯れ掛つた所が大失敗其女は自分の妻であつたので妻は夫の浮氣な心を怨んで自殺したといふ故事を柳化したる句なり

桑の木でびしやりおよしな主ある身 (文化代)

くどかれて桑の實程に色をかへ (文化代)

類推

半分は石で居ながら紙をくひ (?)

黄初平といふ人石を叱して羊に化せしめたといふ仙話を柳化したる

句なり

琴高の股倉鱗ずれが出来 (文化代)

趙の琴高といふ人仙術を以て涿水に沈み數日の後鯉に乗つて浮び出たとあるをいひたるなり

ながめせしまに老い朽ちる斧と小野 (?)

「わが身よにふるながめせしまに」と詠じたる小町と山中に入りて仙人の碁を圍むのを眺めて居る内に携へたる斧の柄が朽ちたりといふ晋の王質とを結び合はせたる句なり

十四本手を出し藪蚊逐つてゐる (文化代)

竹林の七賢人

唐は額日本は箱で年がより (拾遺)

往昔魏の明帝凌雲觀と云ふ高閣を築き韋誕といふ者に命じて閣上の

額に揮毫せしめれば韋誕は籠に乗つて釣上げられ文字を書きたるが何分二十五丈といふ空中にての藝道なれば非常に恐怖した結果下りたときは髯髪悉く雪の如く真白に成つて居たとの昔譚と我朝の浦島の玉手匣とを對照したる句なり

大國は鐵の柱が間男し (拾遺)

吳王闔閭の夫人暑熱を冷さんとて鐵の柱を抱きたればその氣に感じて懷孕し月満ちて鐵丸を産み落としたとの奇談を詠じたるなり

飛んだ産干將莫耶とりあげる (文化代)

やれ重い御子と莫耶はとりあげる (天保代)

安産のあとは莫耶が育てあげ (滑稽)

三句皆同想同型の句なるが偕て吳王は夫人の産落としたる鐵丸を干將といふ刀工に命じて劍を鍛造せしめたるに金鐵の精凝つて鎔解せ

ず干將其妻莫耶と共に髪を剃り指を剪りて爐中に投じたれば始めて鎔けて二振の名劍が出来上つた、そこでその劍を雌雄に擬し陽劍を干將雌劍を莫耶と名づけたとある奇談を狂句としたるなり

からびくと竿を車につけて行き (天明代)

太公望渭水の邊に釣をなしたる所を周文王に迎へられ駟馬の車に同乗し入つて軍師と成つたが真直な釣針にて釣つて居たとあれば一匹の雜魚も魚籠の中には居らざりしとなり

智者の水三行半に地へにじみ (文化代)

覆水盆に返らずの一件なり

直針で釣つたは鯛のつくりなり (安永代)

鯛の刺身を鯛の字の旁に掛けて周の國を釣上げたと狂じたるなり

詩百篇賦した翌日きらず汁 (文化代)